

Sun Server X4-4 設置ガイド

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS. Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は、The Open Group の登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	7
Sun Server X4-4 モデル命名規則	7
最新のファームウェアとソフトウェアの入手	7
ドキュメントとフィードバック	8
このドキュメントについて	8
サポートとトレーニング	8
寄稿者	9
変更履歴	9
設置手順の概要	11
サーバーの機能とコンポーネント	13
フロントパネルの機能	13
バックパネルの機能	15
サーバーがサポートする部品	16
サーバーの管理	18
サーバーの設置準備	25
サーバーの仕様	25
通気のガイドライン	27
出荷梱包インベントリ	28
必要な工具および機器	29
静電気放電に関する注意事項	29
オプションのコンポーネントの取り付け	30
サーバーのラックへの設置	31
安全のための注意事項	31
ラックの互換性	32
固定部品の取り付け	33
スライドレール構成部品の取り付け	34
スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け	37
ケーブル管理アームの取り付け	40

スライドレールと CMA の動作の確認	45
サーバーの配線	47
サーバーの配線	47
電源コードの接続	48
Oracle ILOM への接続	51
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース	52
Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値	53
Oracle ILOM へのログイン	53
Oracle ILOM のネットワーク設定の変更	56
Oracle ILOM のネットワーク設定のテスト	62
Oracle ILOM の終了	64
サービスマニファースト接続のトラブルシューティング	65
Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定	69
Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する	70
Oracle System Assistant をローカルで起動する	72
OS インストール用のサーバードライブの構成	77
ドライブ構成オプション	77
Oracle System Assistant を使用した RAID の構成	79
BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成	90
インストール済み Oracle Solaris OS の構成	103
Oracle Solaris OS の構成ワークシート	103
インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを構成する	107
Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント	109
インストール済みの Oracle Linux OS の構成	111
Oracle Linux 構成ワークシート	111
インストール済みの Oracle Linux OS を構成する	112
Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント	115
インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成	117
インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件	117
Oracle VM 構成ワークシート	118
インストール済み Oracle VM Server を構成する	119
Oracle VM のドキュメント	122
サーバーファームウェアとソフトウェアの入手	123
ファームウェアとソフトウェアの更新	123
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション	124

入手可能なソフトウェアリリースパッケージ	124
ファームウェアとソフトウェアへのアクセス	126
物理メディアのリクエスト	127
更新のインストール	130
システム電源の制御と BIOS メッセージの表示	133
サーバーの電源投入と BIOS メッセージの表示	133
サーバーの電源切断による正常停止	137
サーバーの電源切断による即時停止	140
サーバーのリセット	142
インストールの問題のトラブルシューティング	145
トラブルシューティングおよび診断の参考	145
技術サポート情報ワークシート	146
サーバーのシリアル番号の確認	146
索引	149

このドキュメントの使用方法

このセクションでは、システムの最新のファームウェアとソフトウェア、ドキュメントとフィードバック、およびドキュメント変更履歴の入手方法を説明します。

- 7ページの「Sun Server X4-4 モデル命名規則」
- 7ページの「最新のファームウェアとソフトウェアの入手」
- 8ページの「ドキュメントとフィードバック」
- 8ページの「このドキュメントについて」
- 8ページの「サポートとトレーニング」
- 9ページの「寄稿者」
- 9ページの「変更履歴」

Sun Server X4-4 モデル命名規則

Sun Server X4-4 という名前の意味は次のとおりです。

- Xは、x86 製品であることを意味します。
- 最初の数字4は、サーバーの世代を意味します。
- 2番目の数字、4は、サーバー内のプロセッサソケットの数を意味します。

最新のファームウェアとソフトウェアの入手

各 Oracle x86 サーバー用のファームウェア、ドライバ、その他のハードウェア関連ソフトウェアは定期的に更新されます。

最新バージョンは次の3つのうちいずれかの方法で入手できます。

- Oracle System Assistant - これは、工場出荷時にインストールされる Sun Oracle x86 サーバー向けのオプションです。これには必要なすべてのツールとドライバが含まれており、内蔵 USB フラッシュスティック上にあります。
- My Oracle Support - これは <http://support.oracle.com> にある Oracle サポートの Web サイトです。
- 物理メディアのリクエスト - My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。サポート Web サイト上の「問合せ」リンクを使用してください。

ドキュメントとフィードバック

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Sun Server X4-4	http://www.oracle.com/goto/X4-4/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle ILOM のバージョンについては、このドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Hardware Management Pack。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle HMP のバージョンについては、このドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp

このドキュメントについてのフィードバックは <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せください。

このドキュメントについて

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で入手できます。情報はトピックに基づく形式 (オンラインヘルプと同様) で表示されるため、章、付録、およびセクション番号は含まれません。

サポートとトレーニング

次の Web サイトに追加のリソースがあります。

- サポート: <http://support.oracle.com>
- トレーニング: <http://education.oracle.com>

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通じて電子サポートにアクセスできます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> または聴覚に障害をお持ちの場合は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

寄稿者

主な執筆者: Ralph Woodley、Ray Angelo、Cynthia Chin-Lee、Mark McGothigan、Michael Bechler、Lisa Kuder。

寄稿者: Kenny Tung、Barry Wright、David Savard

変更履歴

次の一覧はこのドキュメントセットのリリース履歴です。

- 2014年4月。初版。

設置手順の概要

このドキュメントでは、最初の電源投入とオペレーティングシステムインストールまでの Oracle の Sun Server X4-4 の初期セットアップと構成について説明します。

次の表は、サーバーを正しく設置するためのタスクを示しています。

手順	説明	リンク
1	プロダクトノートでサーバーの最新の情報について確認します。	http://www.oracle.com/goto/x4-4/docs にある『Sun Server X4-4 プロダクトノート』
2	サーバーのサイト要件、仕様、およびコンポーネントを確認し、注文したすべての品目が揃っていることを確認し、ESD や安全対策について確認し、必要なツールや装置を集めます。	25 ページの「サーバーの設置準備」
3	サーバーの機能を確認します。	13 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」
4	別途出荷されたオプションのコンポーネントを取り付けます。	30 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」
5	サーバーをラックに取り付けます。	31 ページの「サーバーのラックへの設置」
6	データケーブルと電源コードをサーバーに接続します。	47 ページの「サーバーの配線」
7	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続します。	51 ページの「Oracle ILOM への接続」
8	(推奨) Oracle System Assistant を使用してシステムのソフトウェアとファームウェアを設定します。	69 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」

手順	説明	リンク
9	購入した場合は、出荷時にインストール済みのオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアオプションを構成します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 103 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」 ■ 111 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」 ■ 117 ページの「インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成」
10	出荷時にインストール済みのオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアオプションを購入しなかった場合は、サポートされているオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェア製品をインストールします。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Sun Server X4-4 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-4 Linux オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-4 Oracle VM インストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-4 Microsoft Windows オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-4 VMware ESXi インストールガイド』
11	サーバーファームウェアおよびソフトウェアの更新を入手する手順を確認します。	123 ページの「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」
12	システムの電源を制御する手順を確認します。	133 ページの「システム電源の制御と BIOS メッセージの表示」
13	必要な場合は、インストールの問題をトラブルシューティングします。	145 ページの「インストールの問題のトラブルシューティング」

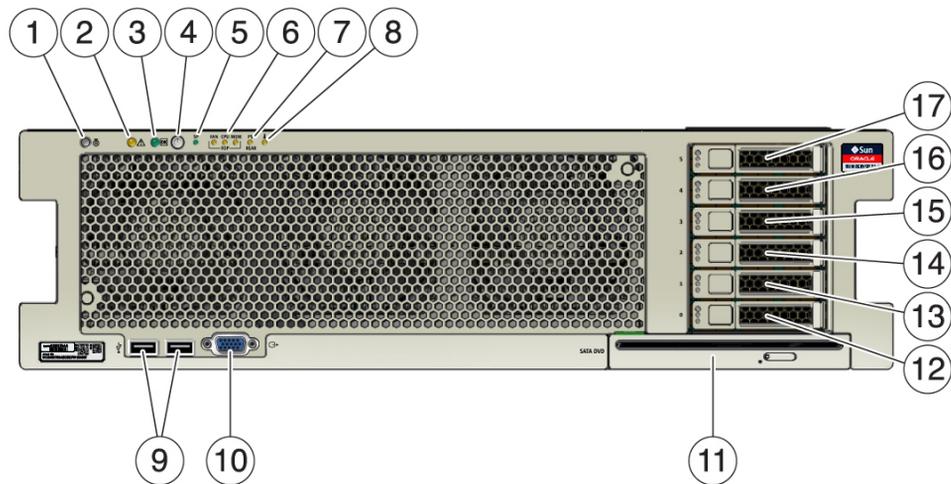
サーバーの機能とコンポーネント

このセクションでは、Oracle の Sun Server X4-4 ハードウェアについて説明します。次の表に示すトピックが含まれています。

説明	リンク
サーバーのフロントパネルおよびバックパネルにあるステータスインジケータ、コネクタ、およびストレージドライブの場所を確認します。	<ul style="list-style-type: none">■ 13 ページの「フロントパネルの機能」■ 15 ページの「バックパネルの機能」
サーバーの機能とコンポーネントを確認します。	16 ページの「サーバーがサポートする部品」
サーバー管理ソフトウェアを確認します。	18 ページの「サーバーの管理」

フロントパネルの機能

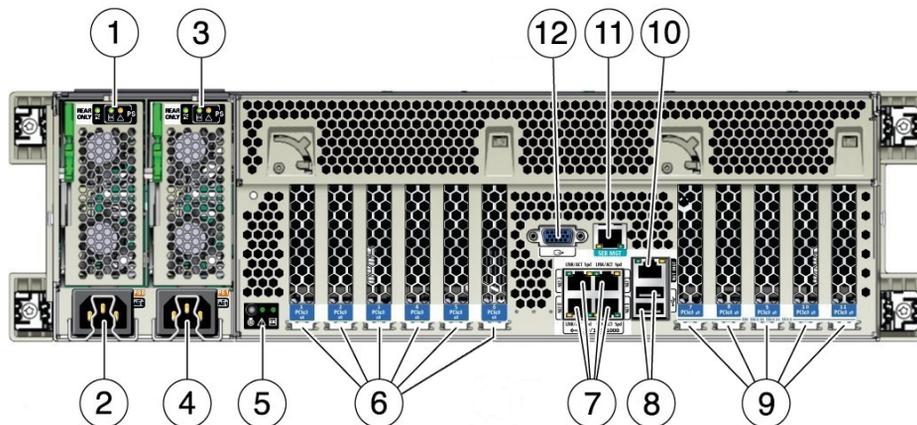
次の図で Sun Server X4-4 のフロントパネルを示し、そのコンポーネントについて説明しています。



吹き出し 番号	説明
1	ロケータインジケータ/ボタン: 白色
2	保守要求インジケータ: オレンジ色
3	電源/OK インジケータ: 緑色
4	電源ボタン
5	SP OK/障害インジケータ: 緑色/オレンジ色
6	ファンモジュール (FAN)、プロセッサ (CPU)、およびメモリーの保守要求インジケータ (3): オレンジ色
7	電源装置 (PS) の障害 (保守要求) インジケータ: オレンジ色
8	過熱警告インジケータ: オレンジ色
9	USB 2.0 ポート (2)
10	DB-15 ビデオポート
11	SATA DVD ドライブ (オプション)
12-17	ストレージドライブスロット 0-5 (下から上)

バックパネルの機能

次の図で Sun Server X4-4 のバックパネルを示し、そのコンポーネントについて説明しています。



吹き出し
番号

説明

1	電源ユニット (PSU) 0 インジケータパネル
2	PSU 0 AC 差し込み口
3	PSU 1 インジケータパネル
4	PSU 1 AC 差し込み口
5	システムステータスインジケータパネル
6	PCIe カードスロット 1 - 6
7	ネットワーク (NET) 10 GbE ポート: NET0-NET3
8	USB 2.0 ポート (2)
9	PCIe カードスロット 7 - 11
10	サービスプロセッサ (SP) ネットワーク管理 (NET MGT) ポート
11	シリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
12	DB-15 ビデオポート

サーバーがサポートする部品

このセクションでは、Sun Server X4-4 でサポートされる部品について説明します。

コンポーネント	Sun Server X4-4
プロセッサ (CPU)	<p>Intel Xeon® E7-8895 v2 15 コア 2.8 GHz プロセッサ。</p> <p>サポートされている構成:</p> <ul style="list-style-type: none">■ ソケット 0 および 1 に取り付けられた 2 つのプロセッサ。■ ソケット 0 から 3 に取り付けられた 4 つのプロセッサ。 <p>CPU の仕様に関する最新の情報については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X4-4 のページを参照してください。</p> <p>http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html</p>
メモリー	<p>サーバーシャーシには、最大 8 つのメモリーライザーモジュール (各 CPU に対して 2 つのライザー) を搭載できます。各ライザーモジュールは、最大 12 枚の DDR3-1600 レジスタ付き ECC 低電圧またはロードリデュースト DIMM をサポートし、プロセッサあたり最大 24 枚の DIMM が可能です。取り付けられた DIMM は同じ種類で同じサイズである必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 4 つのライザーモジュールを使用する 2 CPU システム。最小構成では、各ライザーには 4 枚の DIMM (8G バイト LV RDIMM、16G バイト LV RDIMM、または 32G バイト LV LRDIMM) が装着されます。追加の DIMM は、システムメモリーが最大 1.5T バイトになるまで追加できます。■ 8 つのライザーモジュールを使用する 4 CPU システム。最小構成では、各ライザーには 4 枚の DIMM (8G バイト LV RDIMM、16G バイト LV RDIMM、または 32G バイト LV LRDIMM) が装着されます。追加の DIMM は、システムメモリーが最大 3T バイトになるまで追加できます。

コンポーネント	Sun Server X4-4
ストレージデバイス	<p data-bbox="562 204 1339 262">内部ストレージの場合、サーバーシャーシに次のハードウェアを搭載できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="562 267 1339 324">■ フロントパネルから接続できる2.5インチドライブベイ(6個)。すべてのベイには、SAS-2 HDD または SATA-3 SSD を装着できます。 <li data-bbox="562 341 1339 465">■ サーバーの前面のドライブベイの下に設置される、オプションのDVD+/-RWドライブ。このSATA DVDドライブはUSB-SATAブリッジに接続されるため、このドライブはシステムではUSBストレージデバイスと見なされます。 <li data-bbox="562 482 1339 690">■ SAS-2 HBA PCIe カードオプション: <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="601 522 1339 579">■ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe HBA。RAID レベル 0、1、10 をサポートします。 <li data-bbox="601 597 1339 690">■ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID HBA。バッテリーバックアップ式ライトキャッシュ (BBWC) を搭載した RAID レベル 0、1、1E、10、5、5EE、6 をサポートします。
USB 2.0 ポート	<ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="562 708 1339 732">■ システムの前面に2つのポート、および背面に2つ。 <li data-bbox="562 749 1339 906">■ マザーボードに2つの内蔵ポート。1つのポートは、オプションの出荷時にインストール済みの Oracle System Assistant (OSA) スティック (サーバーを構成するために使用するブート可能なデバイス) を保持します。2つ目のポートでは、システムブート用の USB フラッシュデバイス を保持できます。
VGA ポート	<p data-bbox="562 923 1339 1069">2つの高密度 DB-15 ビデオポートが使用可能です。システムの前面に1つ、背面に1つあります。サーバーには、最大 1600 x 1200 x 16 ビット @ 60Hz (Oracle ILOM リモートコンソールプラス RKVMS を使用してリモートで表示した場合は 1024 x 768) の解像度をサポートする、8M バイトの VGA 2D グラフィックコントローラが組み込まれています。</p> <p data-bbox="562 1086 1339 1138">注-バックパネルで使用できるVGAポートは、モニター認識用のVESA デバイスデータチャネルをサポートしています。</p>
PCI Express 3.0 I/O スロット	<p data-bbox="562 1156 1339 1270">ロープロファイルのPCIeカードを格納するためのPCI Express 3.0 スロット(11個)。SAS HBA カードを含む構成では、HBA カードはスロット2に取り付けられます。すべてのスロットはx8 PCIe 接続をサポートします。2つのスロットには、x16 PCIe カードを取り付けることもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="562 1275 1339 1300">■ スロット1から7、9、および10: x8 コネクタ <li data-bbox="562 1305 1339 1329">■ スロット8および11: x8 または x16 コネクタ <p data-bbox="562 1357 1339 1381">注-PCIe スロット7から11は、4 CPU システムでのみ機能します。</p>
PCI Express I/O カード	<p data-bbox="562 1399 1339 1458">お客様が注文できるI/Oカードの一覧については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X4-4 サーバーのページを参照してください。</p> <p data-bbox="562 1475 1339 1532">http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html</p>

コンポーネント	Sun Server X4-4
Ethernet ポート	バックパネルの4つの10 GbE RJ-45 Ethernet ポート。
サービスプロセッサ	<p>ドーターボードにマウントされた Emulex Pilot 3 ベースボード管理コントローラ (BMC) を含みます。</p> <p>業界標準の IPMI 機能セットをサポートします。</p> <p>IP を介した KVMS、USB、DVD、CD、フロッピー、および ISO イメージのリモート制御をサポートします。</p> <p>シリアルポートを含みます。</p> <p>専用の RJ-45 ギガビット Ethernet (10/100/1000) 管理ポートおよびオプションでホストの 10 GbE ポート (サイドバンド管理) のいずれかを使用して、SP への Ethernet アクセスをサポートしています。</p>
電源装置	<p>2つの 1030/2060 ワット AC 入力オートレンジのホットスワップ対応の電源装置。</p> <p>注 - 2 CPU システムは、低電圧線 100 - 127 VAC または 高電圧線 200 - 240 VAC 電源で動作できます。4 CPU システムは、高電圧線 200 - 240 VAC 電源でのみ動作できます。</p>
冷却ファン	シャーシの前面 (最上部) のホットスワップが可能な冗長ファン (6つ)。電源装置ごとの冗長ファン。
管理ソフトウェア	<p>使用できるオプションには、次のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サービスプロセッサ上の Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。 ■ オプションの内蔵 USB フラッシュドライブ上の Oracle System Assistant (OSA)。 ■ オプションの OSA 内蔵 USB フラッシュドライブ上の Oracle Hardware Management Pack。 ■ Oracle サイトからダウンロード可能な、Oracle Enterprise Management Ops Center。

サーバーの管理

サーバーの設置後は、状況に応じてさまざまなシステム管理のオプションがあります。

多数のサーバーの管理。

さまざまなシステム管理ツールを使用してサーバーを管理できます。システム管理ツールの詳細については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/system-management>

次は、複数システム用のいくつかのシステム管理ツールの概要です。

- 単一のインタフェースからサーバーを管理し、ファームウェア、オペレーティングシステム、またはオペレーティングシステムの更新を複数のサーバーにプロビジョニングする場合は、Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用できます。詳細については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html>

- エンタープライズサーバーをモニターする場合は、Sun Management Center を利用できます。詳細については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/systems/patches/sysmgmt/smc-jsp-138444.html>

- すでにサードパーティーのシステム管理ツールがある場合は、サーバーを多数のサードパーティーツールに組み込むことができます。詳細については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/system-management>

単一のサーバーの管理。

次のセクションでは、単一サーバーの管理ツールについて説明します。

- 19 ページの「Oracle System Assistant」
- 20 ページの「Oracle ILOM」
- 21 ページの「Oracle Hardware Management Pack」
- 22 ページの「UEFI BIOS」

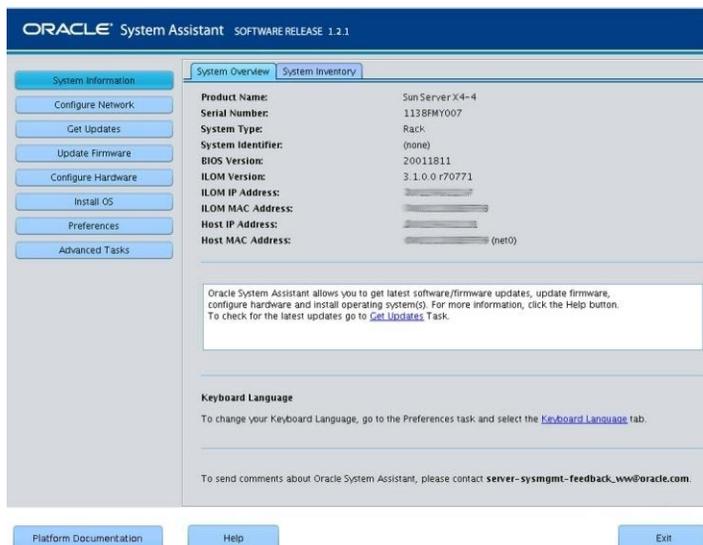
Oracle System Assistant

Oracle System Assistant アプリケーションは、Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守を行うためのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle Solaris、Oracle VM、Linux、または Windows オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、サーバーハードウェアの構成を行うことができます。Oracle System Assistant は、サーバーを購入するときに利用できる、出荷時にインストール済みのオプションです。サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、内蔵 USB フラッシュドライブ上にあります。

製品の初回リリースでは、Sun Server X4-4 は Oracle System Assistant バージョン 1.2.1 をサポートします。

Oracle System Assistant の詳細については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。

次の図は、Oracle System Assistant のシステムのメイン画面の例を示しています。



Oracle ILOM

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーのサービスプロセッサ (SP) に接続するための組み込みの機能です。製品の初回リリースでは、Sun Server X4-4 は Oracle ILOM バージョン 3.2.2 をサポートします。

Oracle ILOM ソフトウェアはサービスプロセッサ上に存在します。サーバーコンポーネントのモニターや管理を行うには、Oracle ILOM を使用します。Oracle ILOM の機能を次に示します。

- ネットワーク情報の構成
- SP のハードウェア構成の表示と編集
- 重要なシステム情報のモニタリングと記録されたイベントの表示
- Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理

Oracle ILOM には、次のいずれかの方法でアクセスできます。

- リモート Ethernet 接続を使用する
- ローカルシリアル接続を使用する
- Oracle ILOM には、Web インタフェースとコマンド行インタフェース (CLI) の両方が用意されています

Oracle ILOM にログインしたときの Web インタフェースの例を次の図に示します。

The screenshot displays the Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) interface for version vx86_3.2.2.0. The interface is divided into several sections:

- Navigation:** A sidebar on the left contains menu items such as System Information, Summary, Processors, Memory, Power, Cooling, Storage, Networking, PCI Devices, Firmware, Open Problems (0), System Log, Remote Control, Host Management, System Management, Power Management, and ILOM Administration.
- Summary Information:** A central panel titled "Summary Information" provides a high-level overview of the system. It includes a "General Information" table and an "Actions" panel.
- General Information Table:**

System Type	Rack Mount
Model	System13
QPart ID	Q10542
Part Number	X4-4-PPN
Serial Number	X4-4-PSN
Component Model	X4-4
Component Serial Number	X4-4-PPN
System Identifier	System13
System Firmware Version	vx86_3.2.2.0
Primary Operating System	Not Available
Host Primary MAC Address	Not Available
ILOM Address	Not Available
ILOM MAC Address	00:10:E0:2E:45:7A
- Actions Panel:** Contains controls for Power State (ON/OFF), Locator Indicator (ON/OFF), Oracle System Assistant (Version: Not Available), System Firmware Update, and Remote Console.
- Status:** A section below the general information showing "Overall Status: OK" and "Total Problem Count: 0".
- Subsystem Status Table:**

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: Four Intel Xeon Processor E7 V2 Series	Processors: 4 / 4 (Installed / Maximum)
Memory	OK	Installed RAM Size: 256 GB	DIMMs: 32 / 96 (Installed / Maximum)
Power	OK	Permitted Power Consumption: 1607 watts Actual Power Consumption: 403 watts	PSUs: 2 / 2 (Installed / Maximum)
Cooling	OK	Inlet Air Temperature: 23 °C Exhaust Air Temperature: 25 °C	Chassis Fans: 6 / 6 (Installed / Maximum) PSU Fans: Not Supported
Storage	Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks: 6 / 6 (Installed / Maximum)
Networking	OK		Ethernet NICs: 4 (Installed)

詳細は、次を参照してください。

- 54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」
- 53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」

Oracle Hardware Management Pack

Oracle Hardware Management Pack は、Oracle サーバーの管理および構成に役立つツールを提供します。製品の初回リリースでは、Sun Server X4-4 は Oracle Hardware Management Pack バージョン 2.2.8 をサポートします。

Hardware Management Pack により、コマンド行ツールを使用して次のことを実行できます。

- オペレーティングシステムレベルで管理エージェントを使用すると、簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) を介した Oracle ハードウェアの帯域内モニタリングが可能になります。この情報を使用して、Oracle サーバーをデータセンター管理インフラストラクチャーに統合できます。
- サーバー上で BIOS、UEFI BIOS、RAID ボリューム、および Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) サービスプロセッサを構成します。
- サーバーコンポーネントのファームウェアをアップグレードします。
- ハードウェア構成情報と Oracle サーバーのステータスを表示します。

- ホストと ILOM の相互接続を介して SNMP トラップを Oracle ILOM サービスプロセッサから転送する ILOM トラッププロキシを構成します。
- Oracle Solaris オペレーティングシステムを実行しているサポート対象のサーバーでゾーニングを構成します。
- IPMItool を使用して、IPMI プロトコルを使用してサーバーサービスプロセッサにアクセスし、管理タスクを実行します。

Oracle Hardware Management Pack の詳細については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp>

UEFI BIOS

Sun Server X4-4 には、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) 準拠の BIOS が組み込まれており、旧バージョンの BIOS に比べて豊富なブートオプションとアダプタカードの構成機能を備えています。

レガシー BIOS と UEFI BIOS の 2 つのブートモードを BIOS に使用できます (下の表で説明)。UEFI BIOS は、いずれかのブートモードをサポートするように構成できます。ただし、一部のデバイスとオペレーティングシステムはまだ UEFI BIOS をサポートしておらず、レガシー BIOS ブートモード用に構成されたサーバーでしかブートできません。

ブートモードは BIOS 設定ユーティリティーで変更できます。新しいモードは、BIOS 設定ユーティリティーで適切に選択してから、「Save Changes and Reset」を実行したあとで構成されます。そのあと、サポートされているオペレーティングシステムでブート候補 (ディスクドライブなど) を構成できます。

注-ブートモードを変更すると、サーバーが前のモードのときに構成されたブート候補 (ディスクドライブなど) は使用できなくなることに注意してください。これらを使用可能にする唯一の方法は、前のブートモードに戻るか、新しいブートモードで再構成することです (すべてのデータが消去されることがあります)。

ブートモードを変更する前に、スイッチバックする場合に備えて Oracle ILOM BIOS のバックアップおよびリストア機能を使用して、前の構成を保存してください。

ブートモード	説明
レガシー BIOS ブートモード	<p data-bbox="692 208 1342 399">レガシー BIOS ブートモードは、BIOS 設定ユーティリティのデフォルトの設定です。ホストバスアダプタ (HBA) によるアダプタオプション ROM の使用を許可するには、レガシー BIOS ブートモードを選択します。ソフトウェアまたはアダプタに UEFI ドライバが付属していない場合、またはシステムがオプション ROM を使用している場合は、レガシー BIOS ブートモードを選択します。</p> <p data-bbox="692 416 1342 503">レガシー BIOS ブートモードでは、レガシー BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティの画面の「Boot Options Priority」リストに一覧表示されます。</p> <p data-bbox="692 520 1342 659">注-ブートモードを選択し、オペレーティングシステムをインストールしたあとは、サーバーをリブートして BIOS の別のブートモードを選択しても、OS はアクセス不可能になり、使用できません。OS をブートするには、前のブートモード設定に戻す必要があります。</p>

ブートモード	説明
UEFI BIOS ブートモード	<p data-bbox="629 210 1272 373">ソフトウェアおよびアダプタに UEFI ドライバが付属している場合は、BIOS 設定ユーティリティから UEFI ドライバを使用する UEFI BIOS ブートモードを選択します。選択を行う手順については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』を参照してください。</p> <p data-bbox="629 395 1272 472">UEFI BIOS ブートモードでは、UEFI BIOS ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティの画面の「Boot Options Priority」リストに一覧表示されます。</p> <p data-bbox="629 494 1272 571">現時点で、UEFI BIOS ブートモードをサポートしているのは、Sun Server X4-4 用にサポートされている次のオペレーティングシステムです。</p> <ul data-bbox="629 583 1272 765" style="list-style-type: none">■ Oracle Solaris 11.1 以降■ Oracle Linux 6.5■ Red Hat Enterprise Linux 6.5■ SUSE Linux Enterprise Server 11 SP3■ Microsoft Windows Server 2008 R2 SP1 および Microsoft Windows Server 2012 <p data-bbox="629 788 1272 864">その他のすべてのオペレーティングシステム (出荷時にインストール済みの OS イメージを含む) は、レガシー BIOS ブートモードを使用する必要があります。</p> <p data-bbox="629 887 1272 963">最新のリストについては、http://www.oracle.com/goto/x4-4/docs にある『Sun Server X4-4 プロダクトノート』を参照してください。</p> <p data-bbox="629 986 1272 1119">注-ブートモードを選択し、オペレーティングシステムをインストールしたあとは、サーバーをリブートして BIOS の別のブートモードを選択しても、OS はアクセス不可能になり、使用できません。OS をブートするには、前のブートモード設定に戻す必要があります。</p>

関連項目

- UEFI BIOS の詳細については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。
- Oracle ILOM については、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある、サポートされている Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のバージョンのドキュメントを参照してください。

サーバーの設置準備

このセクションでは、サーバーをラックに設置する前に把握しておく必要のある情報について説明します。次の表に示すトピックが含まれています。

説明	リンク
サーバーの物理、電気、および環境仕様を確認します。	25 ページの「サーバーの仕様」
ラックマウントサーバーの通気や冷却の要件を確認します。	27 ページの「通気のガイドライン」
サーバーの梱包を解き、出荷キットの内容を確認します。	28 ページの「出荷梱包インベントリ」
設置に必要な道具を組み立てます。	29 ページの「必要な工具および機器」
ESD に関する要件を確認し、安全対策を施します。	29 ページの「静電気放電に関する注意事項」
オプションのコンポーネントがあれば、それらをサーバーに取り付けます。	30 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」

サーバーの仕様

このセクションでは、システムの物理、電気、および環境の仕様について説明します。

物理仕様

次の表に、Sun Server X4-4 の物理仕様の一覧を示します。

パラメータ	値
高さ	129.9 mm (5.1 インチ)
幅	436.5 mm (17.2 インチ)

パラメータ	値
奥行き	732 mm (28.8 インチ)
	752.35 mm (29.6 インチ) (PSU イジェクタを含む)
重量	40 kg (88 ポンド)

電気仕様

次の表に、Sun Server X4-4 の電気仕様の一覧を示します。

注 - 消費電力の最新情報については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Sun Server X4-4 のページ (<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>) を参照してください。

パラメータ	値
公称入力周波数	50/60 Hz
動作入力電圧範囲	100-127 VAC (2 CPU 構成)
	200-240 VAC (2 または 4 CPU 構成)
定格入力電流	100-127 VAC 12A
	200-240 VAC 10A
最大消費電力	2000W
最大熱出力	6824 BTU/時

環境要件

次の表に、Sun Server X4-4 の環境要件を一覧表示します。

パラメータ	値
動作温度 (単一のラック以外のシステム)	海拔ゼロで 5°C - 35°C (41°F - 95°F)
	海拔ゼロで 5°C - 31°C (41°F - 88°F)
非動作時温度 (単一のラック以外のシステム)	-40°C - 68°C (-40°F - 154°F)
動作湿度 (単一のラック以外のシステム)	10 - 90% の相対湿度、結露なし
非動作時湿度 (単一のラック以外のシステム)	最大 93% の相対湿度、結露なし

パラメータ	値
動作高度 (単一のラック以外のシステム)	最高 3,000 m (9,840 フィート)、高度 900 m 以上では 300 m 上昇するたびに最高周囲温度が摂氏 1 度低下。最大高度 2000 m への設置が規制されている中国市場を除く。
非動作時高度 (単一のラック以外のシステム)	0 m - 12,000 m (0 フィート - 40,000 フィート)
騒音	LwAd: 8.9 B (アイドル時および動作中、室温)、8.9 B (最大周囲)、LpAm: 75 dBA (傍観者の位置、最大周囲)

通気のガイドライン

Sun Server X4-4 のようなラックマウント可能なサーバーや装置は通常、ラックの前面から冷たい空気を取り込み、ラックの背面から暖かい空気を排出します。冷却は前面から背面へ行うため、左右の側面に関するエアフロー要件はありません。

エアコン設備は通常、コンピュータールーム全体の温度や湿度を厳密にモニターおよび制御するわけではありません。一般に、ルーム内のメインユニットやその他のユニットの複数の排気口に対応する個々のポイントで、モニタリングが行われます。

床下通気を使用する際には、特に湿度に注意を払うべきです。床下通気を使用する場合、各排気口に近いポイントごとに、モニタリングが行われます。部屋全体の温度や湿度の分布は均一ではありません。

Sun Server X4-4 は、自然対流のエアフロー内に設置された場合に機能するように設計されています。環境仕様を満たせるように、次の要件に従う必要があります。

- システム内に十分なエアフローがあることを確認します。
- 吸気口がシステムの前面に、排気口がシステムの背面に存在していることを確認します。
- システムの前面に 1,232 mm (48.5 インチ) 以上、背面に 914 mm (36 インチ) 以上の通気用の隙間を確保します。
- シャーシの通気が妨げられていないことを確認してください。正常な動作条件では、サーバーは合計 100 CFM の通気を達成できる内蔵送風機を使用します。
- サーバーを通過する空気の温度は 20°C (68°F) を超えないようにしてください。
- 空気が、サーバーの前面から吸気され、背面から排気されることを確認してください。
- サーバーの吸気および排気の両方に使用されるキャビネットドアなどの通気口が塞がれていないことを確認してください。

たとえば、Oracle の Sun Rack II は冷却に最適化されています。前面ドアと背面ドアの穿孔はどちらも 80% なので、ラック内で高レベルのエアフローを実現できます。

- サーバーを取り付ける際は、サーバー正面に1インチ(2.5 mm)以上、サーバーの背面に3.15インチ(80 mm)以上のスペースが必要です。

これらのスペースの値は、ここに示す吸気および排気のインピーダンス(使用可能な開口部)に基づいたもので、開口部が吸気および排気面に均一に分散していると仮定しています。これらの値により冷却パフォーマンスも向上します。

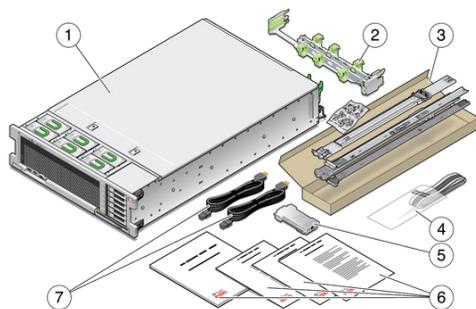
注-キャビネットドアやドアからサーバーまでのスペースなど、吸気および排気に関する制限の組み合わせは、サーバーの冷却パフォーマンスに影響を与える可能性があります。これらの制限を評価する必要があります。サーバーの配置は高温の環境で特に重要です。

- ラックまたはキャビネット内で排気が再循環しないように考慮してください。
- サーバーの排気口の妨げにならないように、ケーブルをまとめてください。

出荷梱包インベントリ

出荷用梱包箱を検査して、物理的な損傷がないかどうかを確認してください。出荷用梱包箱に損傷がある場合は、開梱の際に運送業者の立ち会いを要請してください。業者が検査できるように、箱の中身と梱包材はすべて保管しておいてください。

Sun Server X4-4 に通常同梱されているアイテムは次のとおりです。



吹き出し 番号	説明
1	サーバー
2	ケーブル管理部品
3	ラックマウントキット

吹き出し 番号	説明
4	静電気防止用リストストラップ
5	RJ-45 から DB-9 へのクロスアダプタ
6	印刷版ドキュメント
7	AC 電源コード 2 本

必要なサーバーコンポーネントとほとんどのオプションは出荷時に取り付けられています。ただし、一部の注文オプションは別にパッケージ化される場合があります。可能な場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのコンポーネントを取り付けます。サーバーのオプションの取り付け手順については、[30 ページ](#)の「オプションのコンポーネントの取り付け」を参照してください。

必要な工具および機器

システムを設置するには、次の工具が必要です。

- プラスドライバ (2 番)
- ESD マットおよび接地ストラップ

また、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスも必要です。

- ワークステーション
- ASCII 端末
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

静電気放電に関する注意事項

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置またはサービス時は、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電気による損傷 (ESD) を防止します。



注意-装置の損傷。電子部品が静電気によって損傷すると、システムが永久に使用できなくなるか、公認の保守技術者による修復が必要になることがあります。電子部品を静電気による損傷から保護するため、静電気防止用マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面に部品を置いてください。システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用の接地ストラップを着用してください。

オプションのコンポーネントの取り付け

標準のシステムコンポーネントは工場に取り付けられています。標準構成とは別に購入したオプションのコンポーネントは、個別に出荷され、ほとんどの場合、サーバーをラックに設置する前に取り付ける必要があります。

次のオプションのコンポーネントを注文および別途購入できます。

- PCIe カード
- DDR3 DIMM メモリーキット
- ストレージドライブ
- ソフトウェアメディア

顧客が取り付け可能なコンポーネントを注文した場合は、サーバーの上部カバーにある保守ラベルまたは『[Sun Server X4-4 サービスマニュアル](#)』のコンポーネントの取り外しおよび交換手順を参照してください。

サポートされるコンポーネントとそのパーツ番号は、将来通知なしに変更される可能性があります。最新の一覧については、次を参照してください。

https://support.oracle.com/handbook_private/

注- このサイトにアクセスするには、Oracle Web アカウントが必要です。

サーバーの名前とモデルをクリックします。表示されるサーバーの製品ページで、「Full Components List」をクリックしてサポートされているコンポーネントのリストを表示します。

サーバーのラックへの設置

このセクションでは、ラックマウントキットのレール構成部品を使用し、サーバーをラック内に取り付ける方法について説明します。レール構成部品を購入した場合は、この手順を実行します。

注-このガイドでは、用語「ラック」とはオープンラックまたはクローズキャビネットを意味します。

説明	リンク
安全上の注意事項を確認します。	31 ページの「安全のための注意事項」
ラックの互換性要件を確認します。	32 ページの「ラックの互換性」
サーバーに固定部品を取り付けます。	33 ページの「固定部品の取り付け」
工具不要のスライドレール構成部品をラックに取り付けます。	34 ページの「スライドレール構成部品の取り付け」
サーバーをスライドレール構成部品に取り付けます。	37 ページの「スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け」
(オプション)サーバーケーブルを引き回すためのケーブル管理アームを装着します。	40 ページの「ケーブル管理アームの取り付け」
スライドレールとケーブル管理アームが正しく機能することを確認します。	45 ページの「スライドレールと CMA の動作の確認」

安全のための注意事項

このセクションでは、サーバーをラックに設置する際に従う必要のある安全上の注意事項について説明します。



注意-機器の損傷や、作業者の負傷。上方が重くなり転倒することがないように、機器は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。機器の設置中にラックが倒れないように、ラックの転倒防止バーを配備してください。



注意-動作時周辺温度の上昇。密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。したがって、サーバーに対して指定されている最大周辺温度 (Tma) に適した環境に装置を設置することを検討するようにしてください。サーバーの環境要件については、26 ページの「環境要件」を参照してください。



注意-通気の減少。装置をラック内に設置する際に、装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないようにしてください。



注意-機器の損傷や、作業者の負傷。ラックに機器を取り付ける場合、機械的加重が不均一なために危険な状態にならないようにする必要があります。



注意-回路の過電流。電源回路への装置の接続、および回路の過負荷によって発生する可能性のある過電流対策や電源配線についても考慮するようにしてください。これについて対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力に従った配慮が必要です。



注意-作業者の負傷。ラック取付け式機器の信頼できる接地を維持する必要があります。直接接続以外の分岐回路への電源接続(テーブルタップの使用など)の場合は、特に注意を払うようにしてください。



注意-装置の損傷。スライドレールに搭載した機器を棚または作業スペースとして使用しないでください。

ラックの互換性

使用するラックがオプションのスライドレールおよびケーブル管理アーム (CMA) と互換性があることを確認します。オプションのスライドレールは、次の表に示す仕様を満たすさまざまな標準ラックに対応しています。

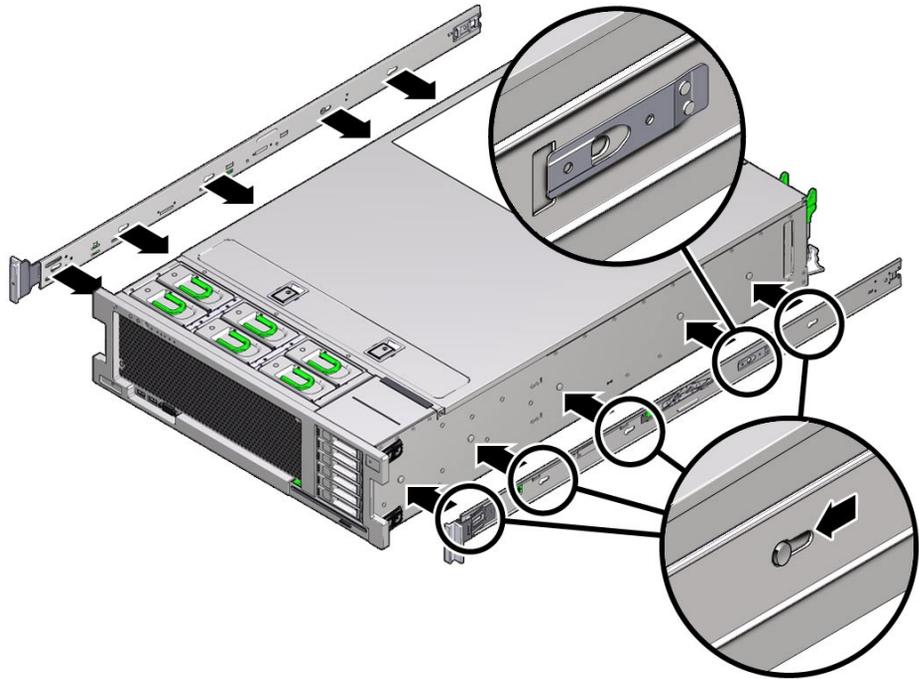
項目	要件
構造	前後左右で固定する形式の4ポストラック。2ポストラックは互換性がありません。
ラック水平方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に適合すること。M6 または 9.5 平方ミリメートルのネジ穴だけがサポートされています。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の距離	610 から 915 mm (24 から 36 インチ)。
前側取り付け面の前面の隙間	キャビネット前面ドアまでの距離が 25.4 mm (1 インチ) 以上あること。
前側取り付け面の背後の隙間	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット後面ドアまで 900 mm (35.5 インチ) 以上の間隔があり、ケーブル管理アームを使用しない場合は 770 mm (30.4 インチ) 以上あります。
前方取り付け面と後方取り付け面の間の空間の幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 456 mm (18 インチ) 以上であること。
サーバーの寸法	奥行き: (PSU イジェクタを含まない長さ): 732 mm (28.8 インチ)。 幅: (耳を含まない長さ): 436.5 mm (17.2 インチ)。 高さ: 129.9 mm (5.1 インチ)。

▼ 固定部品の取り付け

固定部品をサーバーの側面に取り付けるには、次の手順に従います。

- 1 スライドレールロックがサーバーの前面に来て、固定部品の5つの鍵穴の開口部がシャーシの側面にある5つの位置決め用ピンとちょうど合うように、シャーシに対して固定部品を位置合わせします。

注- 固定部品はすべて同一で、シャーシのどちら側にも取り付けることができます。



- 2 5つのシャーシ位置決め用ピンの頭を固定部品の5つの鍵穴の開口部に挿入し、固定部品を、クリップがカチッと音がして固定されるまで、シャーシの前面に向けて引っ張ります。
- 3 背面の位置決め用ピンが固定部品のクリップにかみ合っていることを確認します。
- 4 手順1から3を繰り返して、サーバーの反対側の側面に残りの固定部品を取り付けます。

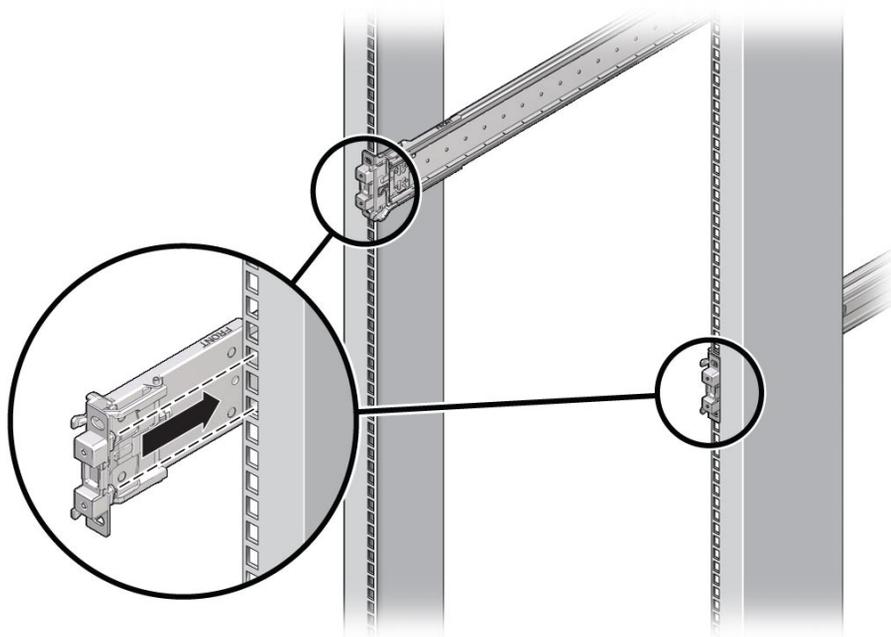
▼ スライドレール構成部品の取り付け

次の手順を実行して、スライドレール構成部品をラックに取り付けます。

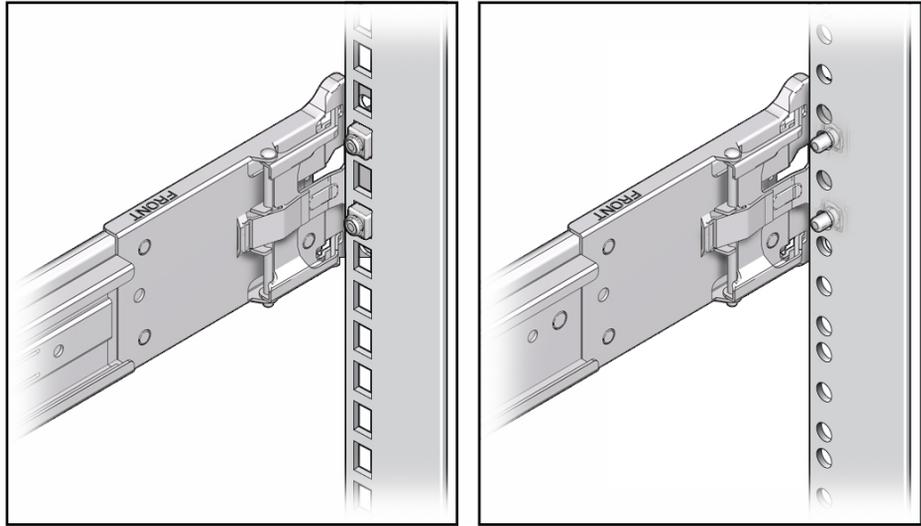
注-スライドレール構成部品では、9.5 mmの四角穴およびM6丸穴のラックのみをサポートしています。7.2 mm、M5、10-32の取り付け穴など、その他のすべてのラックはサポートされていません。レール穴のサイズについては、ラックのドキュメントを参照してください。

スライドレール構成部品をラックに取り付けるには:

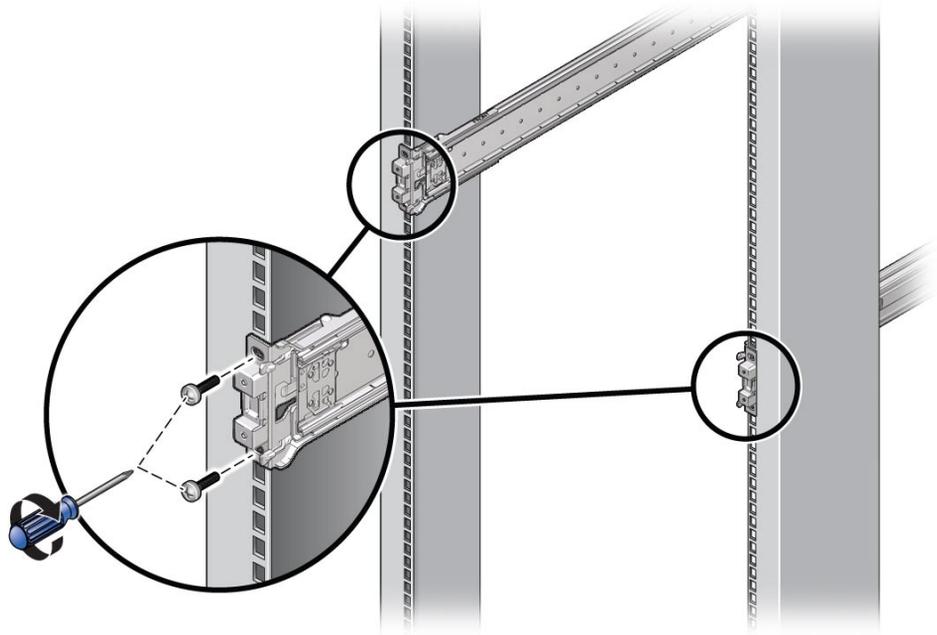
- 1 (オプション) サーバーが設置されているラックを移動する必要がある場合は、取り付けネジとケージナットを使用してスライドレール構成部品を取り付けることをお勧めします。
これらのケージナットの取り付け手順については、レールラックマウントキットの概要と情報カードを参照してください。このカードはラックキットに含まれています。
- 2 スライドレール構成部品の前面の固定部品が前面のラックのポストの外側に来るように、また、スライドレール構成部品の背面の固定部品が背面のラックのポストの内側に来るように、ラック内でスライドレール構成部品を位置決めします。
- 3 スライドレール構成部品の取り付けピンと、前面と背面のラックのポストの取り付け穴の位置合わせをします。次に、取り付けピンがラックにかみ合うまで構成部品をラックの背面の方向に押し込んで、構成部品を固定します。
取り付けピンとラックがかみ合うと、カチッという音がします。



注 - スライド構成部品の取り付けピンは、9.5 mm 四角穴と M6 丸型取り付け穴でのみ使用できます。それ以外のサイズの実取り付け穴はサポートされていません。



- 4 (オプション) 取り付けネジとケージナットを使用してスライドレール構成部品を取り付けるように選択した場合、前面と背面の両方のスライドレール固定部品とラックのポストの穴に M6 取り付けネジを通し、ケージナットで締め付けます。



- 5 手順2から4を繰り返して、残りのスライドレール構成部品を取り付けます。

▼ スライドレール構成部品へのサーバーの取り付け

この手順を使用して、固定部品を取り付けたサーバーシャーシを、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品に装着します。

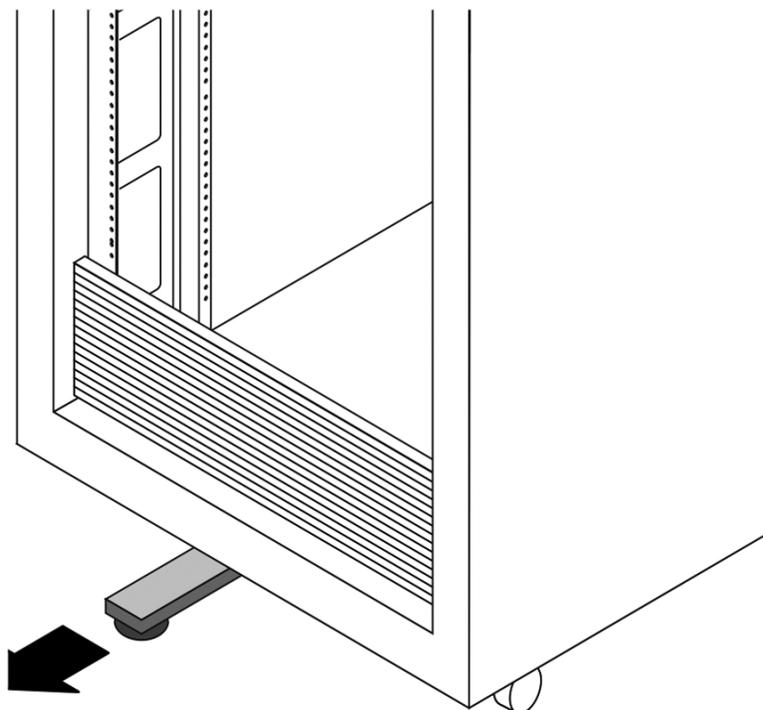


注意-機器の損傷や、作業者の負傷。サーバーは重いので、この手順では少なくとも2名の作業者が必要です。この手順を1人で実行すると、機器が損傷したり、けがをする可能性があります。



注意-機器の損傷や、作業者の負傷。上方が重くなり転倒することがないように、機器は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。転倒防止用のバーを伸ばして、機器の設置中にラックが転倒しないようにしてください。

- 1 利用可能な場合は、ラックの下部の転倒防止バーを伸ばします。
手順については、ラックのドキュメントを参照してください。



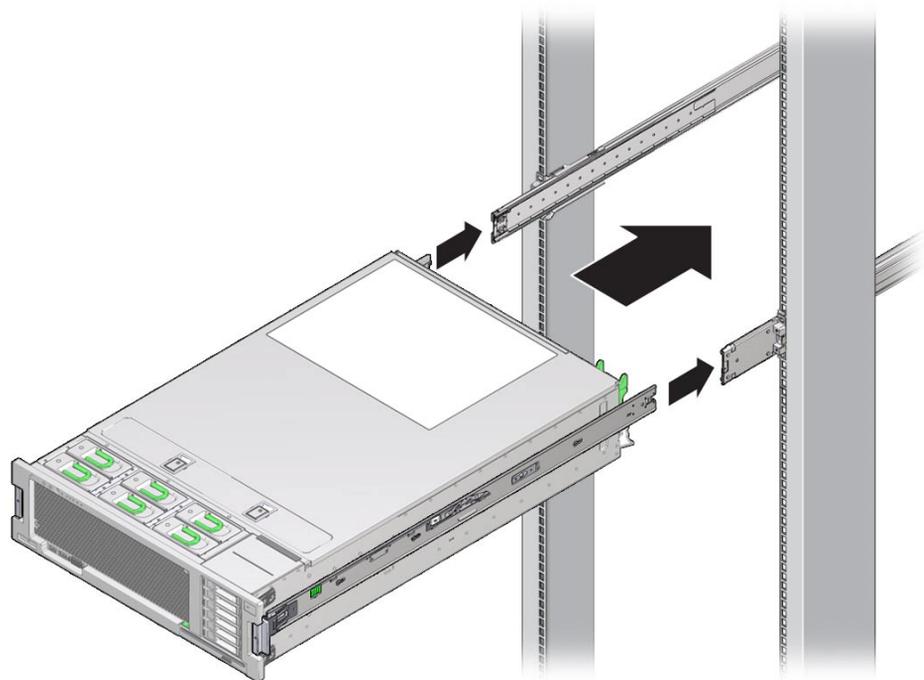


注意- 機器が損傷したり、作業者がけがをしたりします。ラックに転倒防止バーがないと、ラックが転倒することがあります。

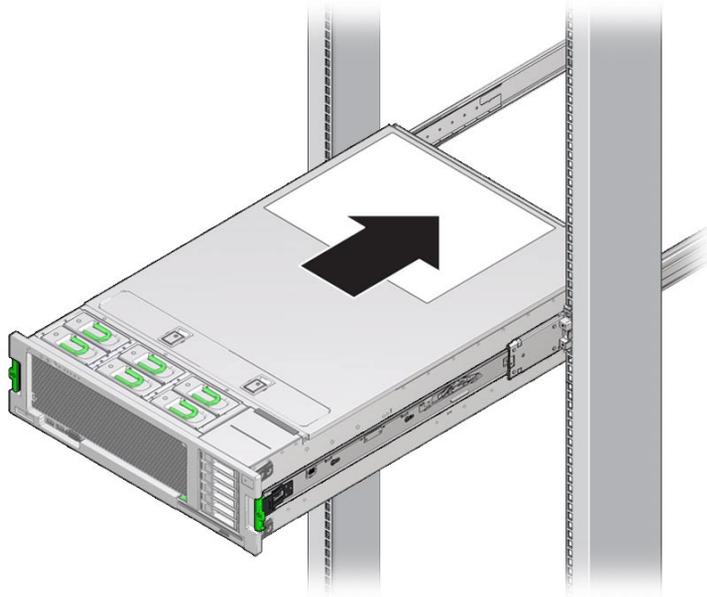
- 2 スライドレールをラックのスライドレール構成部品に可能なかぎり奥まで押し込みます。
- 3 固定部品の後端が、ラックに取り付けられているスライドレール構成部品と整列するようにサーバーを持ち上げます。
- 4 取り付けブラケットをスライドレールに挿入し、取り付けブラケットがスライドレールのストップに接触するまでサーバーをラック内に押し込みます (約 **30 cm (12 インチ)**)。)



注意- 機器の損傷や、作業者の負傷。サーバーをスライドレールに挿入するとき、固定部品の上下の取り付けリップがスライドレールに挿入されていることを確認します。サーバーが正しく取り付けられている場合は、サーバーを前後に簡単にスライドできます。ユニットを簡単にスライドできない場合は、各取り付けリップが正しく挿入されていることを確認してください。固定部品が正しく挿入されていないと、ユニットをラックから取り外すときに落としてしまう可能性があります。



- 5 両方の固定部品の緑色のスライドレールリリースボタンを同時に押しながら、サーバーをラック内に押し込みます。固定部品の前面のスライドレールロックがスライドレール構成部品にかみ合うまで押し込みます。かみ合うと、カチッと音がします。



注意-機器の損傷や、作業者の負傷。サーバーがラックにしっかりと取り付けられていること、およびスライドレールロックが固定部品にかみ合っていることを確認してから次の手順に進みます。

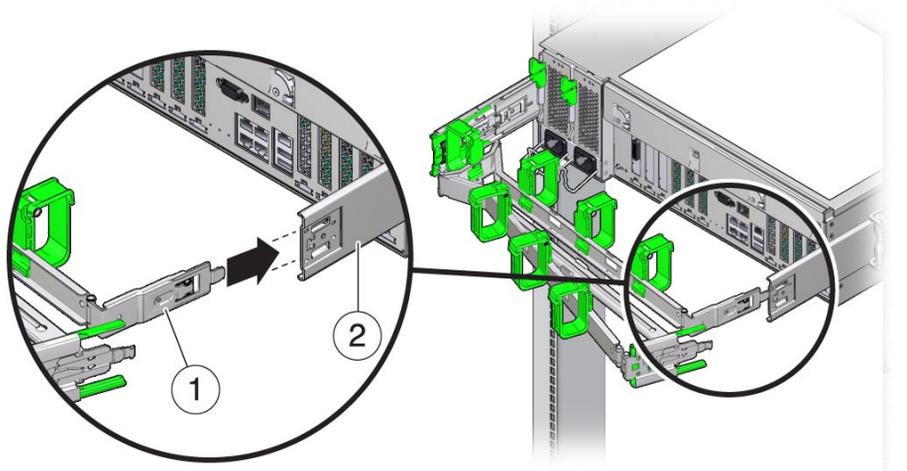
▼ ケーブル管理アームの取り付け

ケーブル管理アーム (CMA) はオプションの構成部品であり、ラック内のサーバーケーブルの配線に使用できます。

- 1 **CMA** 部品の梱包を解きます。
- 2 **CMA** を機器ラックの背面に移動し、サーバーの背後に十分な作業スペースがあることを確認します。

注-この手順の「左」と「右」は、装置ラックの背面から見たときの左と右を示します。

- 3 テープを剥がしてCMAの部品を分けます。
- 4 CMAの固定部品コネクタを、カチッと音がして固定されるまで、右側のスライドレールに差し込みます。

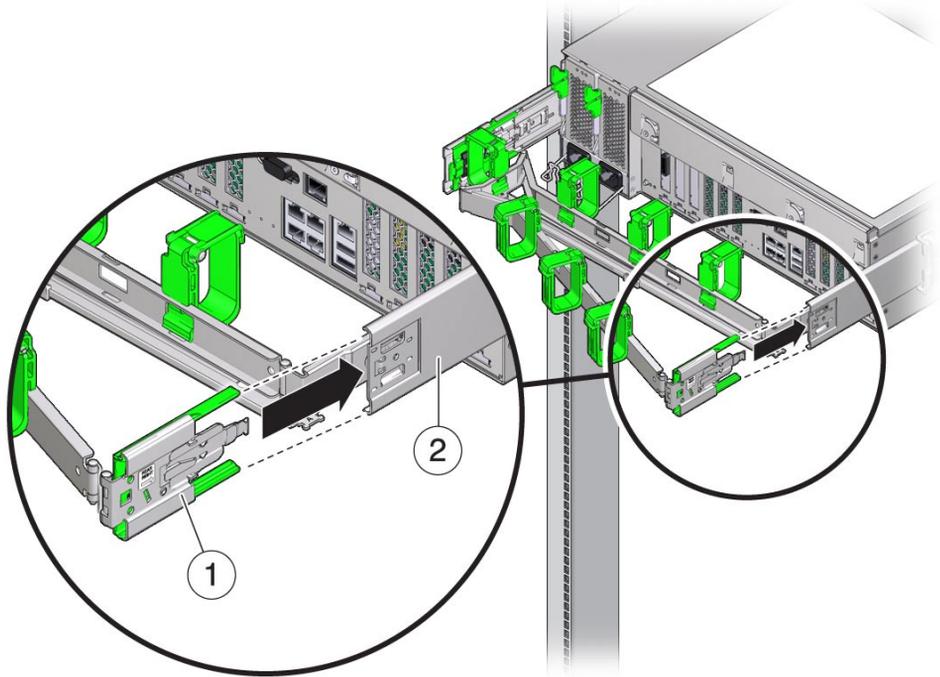


吹き出し
番号

説明

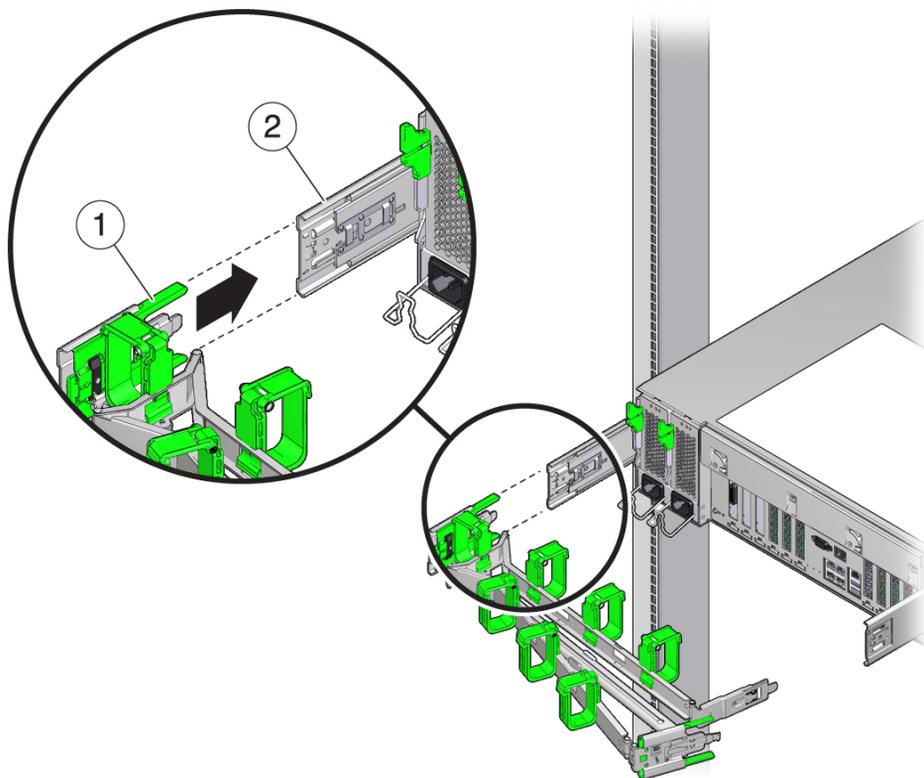
- | | |
|---|-----------|
| 1 | CMA 固定部品 |
| 2 | 右側スライドレール |

- 5 右側のCMA スライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、右側のスライドレール構成部品に差し込みます。



吹き出し 番号	説明
1	CMA スライドレールコネクタ
2	右側スライドレール

- 6 左側のCMAスライドレールコネクタを、「カチッ」と音がして固定されるまで、左側のスライドレール構成部品に差し込みます。



吹き出し 番号	説明
1	CMAスライドレールコネクタ
2	左側スライドレール

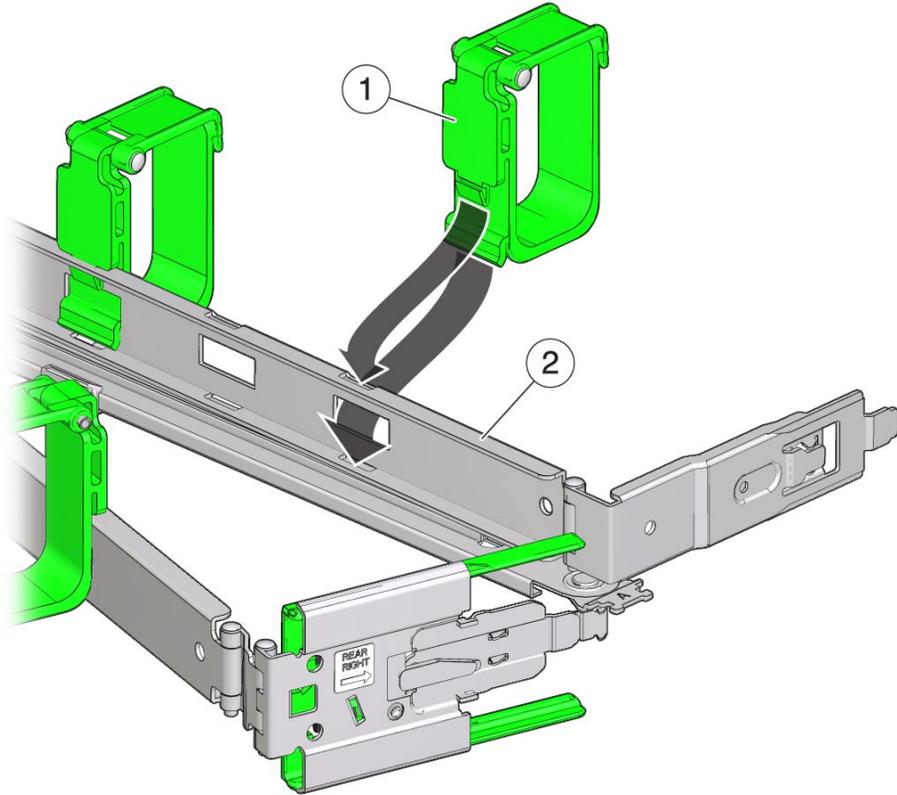
- 7 必要に応じて、サーバーまでケーブルを配線して取り付けます。

注-サーバーケーブルの取り付け方法については、[47 ページの「サーバーの配線」](#)を参照してください。

- 8 必要に応じて、ケーブルフックとループストラップをCMAに取り付け、所定の位置に押し込んでケーブルを固定します。

注- ケーブルフックとループストラップは、CMA にあらかじめ取り付けられています。ケーブルフックとループストラップを CMA に取り付け直す必要がある場合は、この手順を実行してください。

最善の結果を得るには、3つのケーブルストラップを CMA の背面側に等間隔に配置し、3つのケーブルストラップをサーバーにもっとも近い CMA の側面に配置します。



吹き出し 番号	説明
1	CMA ケーブルストラップ
2	CMA アーム

▼ スライドレールとCMAの動作の確認

スライドレールとCMAが正しく動作していることを確認するには、次の手順に従います。

注-この手順は、2人の作業員で実行することをお勧めします。1人がサーバーをラックの前後に動かし、もう1人がケーブルとCMAを監視します。

- 1 スライドレールがストッパに達するまで、サーバーをラックからゆっくりと引き出します。
- 2 接続されているケーブルが、引っかかったり、ねじれていないか点検します。
- 3 **CMA**がスライドレールからいっぱいまで伸びることを確認します。
- 4 次の手順に従って、サーバーをラック内に押し込みます。
サーバーを完全に引き出したときに、サーバーをラックに戻すために2対のスライドレールストップを解放する必要があります。
 - a. 最初の対のストップでは、両方の緑色のレバーを同時に押し、サーバーをラックに向かってスライドさせます。
最初の対のストップは各スライドレールの内側(サーバーのバックパネルのすぐ後ろ)にあるレバーです。
サーバーは約46 cm (18 インチ)スライドして停止します。
 - b. ケーブルと**CMA**が引っかからずに格納されることを確認します。
 - c. 2番目の対のストップでは、両方の緑色のスライドレールリリースボタンを同時に押し、両方のスライドレールロックがかみ合うまでサーバーを完全にラック内に押し込みます。
2番目の対のストップは、サーバーの前面にあるスライドレールリリースボタンです。
- 5 必要に応じて、ケーブルストラップと**CMA**を調整します。

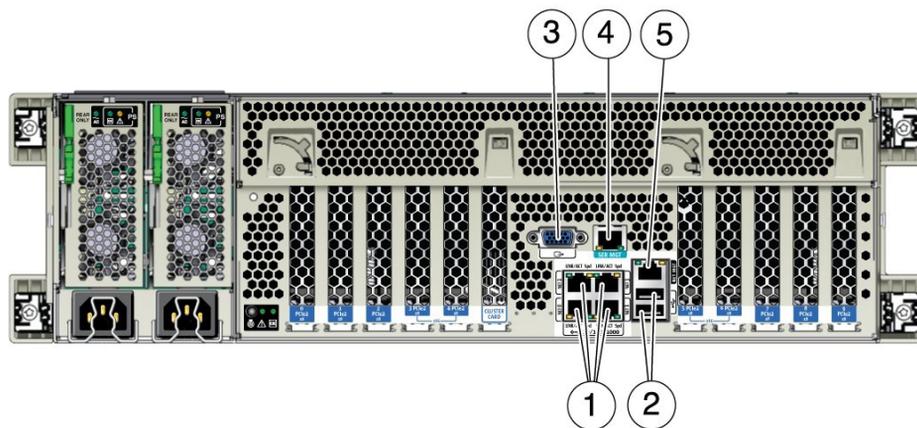
サーバーの配線

このセクションでは、はじめてケーブルを接続して電源を投入する方法について説明します。次の表に示すトピックが含まれています。

説明	リンク
サーバーにデータケーブルを接続します。	47 ページの「サーバーの配線」
サーバーに電源コードを接続します。	48 ページの「電源コードの接続」

▼ サーバーの配線

次の図に、サーバーのバックパネルのコネクタおよびポートの位置を示します。



吹き出し 番号	説明
1	ネットワークの 10 GbE ポート: NET0-NET3
2	USB 2.0 ポート (2)

吹き出し 番号	説明
3	DB-15 ビデオポート
4	サービスプロセッサのシリアル管理 (SER MGT)/RJ-45 シリアルポート
5	サービスプロセッサネットワーク管理 (NET MGT) Ethernet ポート

- 1 **KVM** コンソールに直接接続するには、マウスとキーボードをサーバーの **USB** ポート [2] に、モニターを **DB-15** ビデオポート [5] に接続します。
- 2 サーバープロセッサへの管理接続を確立するには:
 - **Ethernet**: ネットワーク接続 (推奨は別の管理ネットワーク) を介して **Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)** の **Web** またはコマンド行インタフェースにアクセスする予定の場合は、**Ethernet** ケーブルを、**NET MGT** [3] とラベル付けされたサーバーのネットワーク管理ポートに接続します。

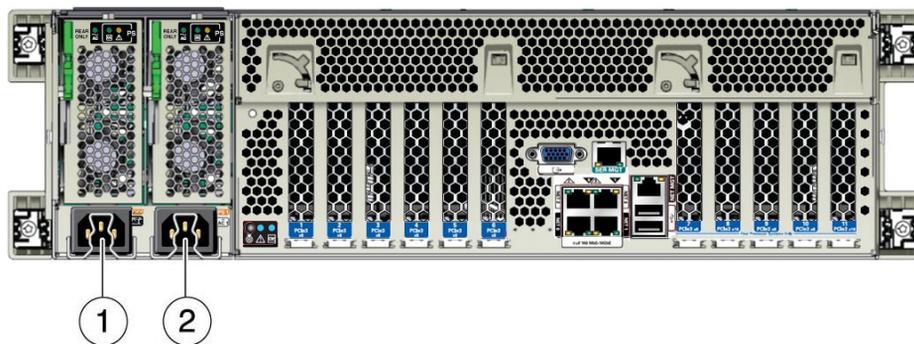
注-サービスプロセッサ (SP) は、デフォルトで **NET MGT** (帯域外) ポートを使用します。代わりに、SP がサーバーの 4 つの 10 GbE Ethernet ポートのいずれかを使用するように構成できます。SP は構成済みの Ethernet ポートのみを使用します。

- **直接シリアル**: シリアル管理ポートを使用して **Oracle ILOM** コマンド行インタフェースにアクセスする予定の場合は、シリアルヌルモデムケーブルを、端末、または端末エミュレーションソフトウェアを実行しているクライアントから、**SER MGT** [4] とラベル付けされたサーバーの **RJ-45** シリアルポートに接続します。
- 3 サーバーをネットワークに接続するには、必要に応じて **Ethernet** ケーブルを **10** ギガビット **Ethernet** ポート [1] に接続します。

次の手順 [48 ページの「電源コードの接続」](#) に進みます。

▼ 電源コードの接続

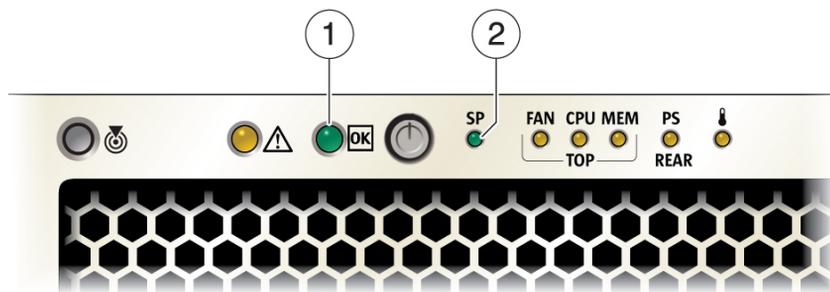
次の手順に従って、電源コードをサーバーに接続します。電源コードが接続されると、サーバーはスタンバイ電源モードに入ります。次の図は、AC 電源コネクタの位置を示しています。



吹き出し 番号	説明
1	ケーブルクリップ付きの電源装置0のAC差し込み口コネクタ
2	ケーブルクリップ付きの電源装置1のAC差し込み口コネクタ

注-2 CPU システムは、低電圧線 100 - 127 VAC または 高電圧線 200 - 240 VAC 電源で動作します。4 CPU システムは、高電圧線 200 - 240 VAC 電源でのみ動作します。

- 1 アース付きの2本のサーバー電源コードをアース付きコンセントに接続します。
- 2 2本のサーバー電源コードをサーバーのバックパネルのACコネクタに接続し(前の図の1と2)、コネクタのケーブルクリップを使用して固定します。
電源が接続されると、サーバーはブートしてスタンバイ電源モードに入ります。
 - SPが起動するときにSP OK/障害インジケータ [2] が点滅し、SPの準備ができるまで、主電源/OKインジケータ [1] は点灯しません。
 - 数分後に主電源/OKインジケータがスタンバイ点滅パターンで点滅(0.1秒間オン、2.9秒間オフ)し、SP(およびOracle ILOM)が使用できる状態であることを示します。この時点ではサーバーはまだ初期化されていませんし、全電力も投入されていません。



吹き出し 番号	説明
1	主電源/OK インジケータ
2	SP OK/障害インジケータ

- 3 指示されるまで、サーバーに全電力を投入しないでください。次のタスクに進みません。

- 次の手順
- 51 ページの「Oracle ILOM への接続」
 - 69 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」
 - 77 ページの「OS インストール用のサーバードライブの構成」

Oracle ILOM への接続

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーコンポーネントのモニターと管理に使用できる組み込みのツールです。Oracle ILOM を使用すると、次のタスクを実行できます。

- サーバーの電源投入や電源切断を含め、サーバーをローカルまたはリモートで管理する
- 重要なシステム情報のモニター、記録されたイベントの表示、通知の取得、トラブルシューティングツールの実行を行う
- サーバーハードウェア構成を表示および編集する
- 会社のセキュアなインフラストラクチャーを使用して Oracle ILOM ユーザーアカウントを管理する
- ホストコンソールにリモートでアクセスする
- Oracle ILOM およびサーバーの BIOS 構成情報をバックアップする

このセクションでは、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI)、または Web ブラウザユーザーインタフェース (BUI) を構成およびアクセスして、サーバーを管理する方法について説明します。

説明	リンク
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェースについて学習します。	52 ページの「Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース」
ネットワークポートとデフォルト値について学習します。	53 ページの「Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値」
シリアルポートに接続された端末を使用して Oracle ILOM に直接ログインします。	53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」
Ethernet 接続を使用してネットワーク経由で Oracle ILOM にログインします。	54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」

説明	リンク
Oracle ILOM ネットワーク設定を構成します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 56 ページの「Oracle ILOM CLI でのネットワーク設定の変更」 ■ 61 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更」 ■ 62 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」 ■ 64 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」
Oracle ILOM を終了します。	64 ページの「Oracle ILOM の終了」
サービスプロセッサ接続をトラブルシューティングします。	65 ページの「サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング」

関連項目

- Oracle System Assistant からの Oracle ILOM の構成については、69 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」を参照してください
- Oracle ILOM の詳細な使用手順については、サポートされている Oracle ILOM のバージョンのドキュメントを参照してください (サポートされているバージョンは『Sun Server X4-4 プロダクトノート』にリストされています): <http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>

Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース

次の表に、Oracle ILOM のコンポーネントと機能を示します。

コンポーネント	機能
ハードウェア	<ul style="list-style-type: none"> ■ ファン、ストレージドライブ、電源装置など、各コンポーネントのステータスと構成をモニターする組み込みのサービスプロセッサ (SP) チップセット。 ■ 背面パネルの2つの外部接続: NET MGT ポート (Ethernet 接続)、および SER MGT (RJ-45 シリアル接続)。
インタフェース	<ul style="list-style-type: none"> ■ Web ブラウザのインタフェース ■ SSH コマンド行インタフェース (CLI) ■ IPMI v2.0 CLI ■ SNMP v3 インタフェース

Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値

Sun Server X4-4 は、Oracle ILOM が IPv4 および IPv6 ネットワーク環境で完全に動作することを可能にする IPv4 と IPv6 のデュアルスタック設定をサポートしています。

- **IPv4** 構成の場合、DHCP がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の DHCP サーバーがネットワーク設定をサーバーに自動的に割り当てます。
- **IPv6** 構成の場合、IPv6 ステートレス自動設定がデフォルトで有効になっているので、ネットワーク上の IPv6 ルーターがネットワーク設定を割り当てます。

一般的な構成では、これらのデフォルト設定を受け入れます。

注-サーバーに自動的に割り当てられた IP アドレスまたはホスト名を確認するには、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに付属しているネットワークツールを使用してください。

Oracle ILOM へのログイン

このセクションの手順に従って、割り当てられた設定が正しく動作していることをテストし、Oracle ILOM への接続をローカルおよびリモートで確立できます。

- ローカルでログインするには、[53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)を参照してください。
- リモートでログインするには、サーバー SP に割り当てられた IP アドレス、ホスト名、または IPv6 ローカルリンク名を使用し、[54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」](#)の手順に従います。

▼ ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン

この手順では、サーバー SP の IP アドレスを知っている必要はありません。ただし、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っている必要があります。

注-サーバーの出荷時に設定されているデフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは root、パスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

始める前に あらかじめシリアルケーブルが端末 (または端末エミュレーションクライアント) からサーバー背面の SER MGT ポートに接続されている必要があります。この接続の詳細については、[47 ページの「サーバーの配線」](#)を参照してください。

- 1 端末(または端末エミュレーションクライアント)で、次のシリアル通信設定が構成されていることを確認します。
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー
 - ハードウェアフロー制御を無効化 (CTS/RTS)
- 2 端末キーボードで、**Enter** を押して **Oracle ILOM** へのシリアルコンソール接続を確立します。
Oracle ILOM へのログインプロンプトが表示されます。
- 3 管理者アカウントを使用して、**Oracle ILOM** のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

▼ リモート **Ethernet** 接続を使用した **Oracle ILOM** へのログイン

この手順では、Oracle ILOM 管理者アカウントを持っていることと、サーバー SP の IP アドレスまたはホスト名を知っていることが必要です。コマンド行インタフェース (CLI) または Web インタフェースを使用してログインする手順を、次で説明します。

注-サーバーの出荷時に設定されているデフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは root、パスワードは changeme です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

始める前に あらかじめネットワークケーブルが管理ネットワークからサーバー背面の NET MGT ポートに接続されている必要があります。この接続の詳細については、[47 ページ](#)の「サーバーの配線」を参照してください。

- 1 次のいずれかの方法を使用して、**Oracle ILOM** への接続を確立します。
 - **Oracle ILOM CLI** から、**Secure Shell** セッションを開始します。次のコマンドを入力します。
`ssh ユーザー名@ホスト`

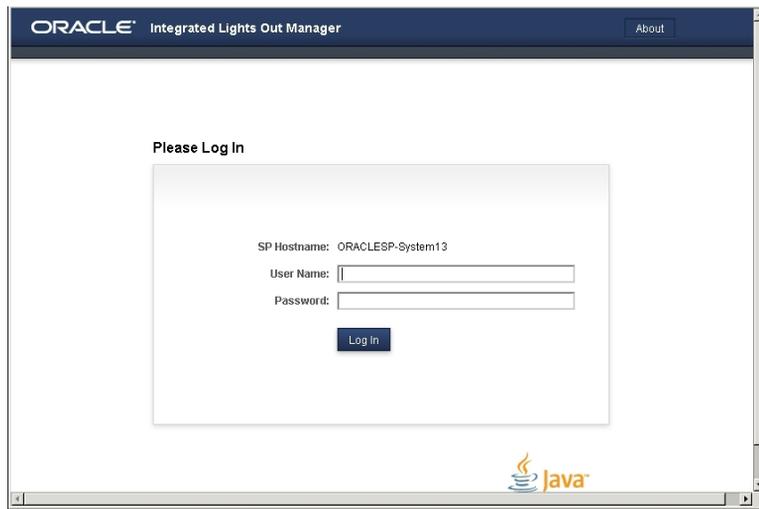
ここで、*username* は管理者権限を持つアカウントのユーザー名 (デフォルトの管理者アカウントは *root*)、*host* はサーバー SP の IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) のいずれかです。

パスワードの入力を求める Oracle ILOM のプロンプトが表示されます。

Password:

- Oracle ILOM の Web インタフェースから、Web ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの IP アドレスを入力して、**Enter** を押します。

Oracle ILOM Web ログインページが表示されます。



- 2 次のいずれかの方法を使用して **Oracle ILOM** にログインします。

注 - Oracle ILOM への最初のログインやアクセスが可能のように、システムではデフォルトの管理者アカウントとパスワードが用意されています。セキュアな環境を構築するため、Oracle ILOM への初回ログイン後、デフォルトの管理者アカウント (*root*) のデフォルトのパスワード (*changeme*) を変更する必要があります。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

- Oracle ILOM CLI から、パスワードプロンプトで、パスワードを入力して **Enter** を押します。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (*->*) が表示されます。

- Oracle ILOM の Web インタフェースから、ログインページでユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。

Oracle ILOM へのログインに成功したことを示す「Summary」ページが表示されます。例:

The screenshot shows the Oracle ILOM Web Interface. The top navigation bar includes 'ORACLE Integrated Lights Out Manager vx86_3.2.2.0', 'About', 'Refresh', and 'Logout'. The user is logged in as 'root' with role 'auro' on host 'SP Hostname: ORACLESP-System13'. The left sidebar shows a navigation menu with 'Summary' selected. The main content area is titled 'Summary Information' and contains the following sections:

General Information

System Type	Rack Mount
Model	System13
OPart ID	Q10542
Part Number	X4-4-PPN
Serial Number	X4-4-PPN
Component Model	X4-4
Component Part Number	X4-4-PPN
Component Serial Number	System13
System Identifier	-
System Firmware Version	vx86_3.2.2.0
Primary Operating System	Not Available
Host Primary MAC Address	Not Available
ILOM Address	Not Available
ILOM MAC Address	00:10:E0:2E:45:7A

Actions

Power State: ON Turn Off

Locator Indicator: OFF Turn On

Oracle System Assistant Version: Not Available

System Firmware Update

Remote Console

Status

Overall Status: OK Total Problem Count: 0

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	<input checked="" type="radio"/> OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: Four Intel Xeon Processor E7 V2 Series	Processors: 4 / 4 (Installed / Maximum)
Memory	<input checked="" type="radio"/> OK	Installed RAM Size: 256 GB	DIMMs: 32 / 96 (Installed / Maximum)
Power	<input checked="" type="radio"/> OK	Permitted Power Consumption: 1607 watts Actual Power Consumption: 403 watts	PSUs: 2 / 2 (Installed / Maximum)
Cooling	<input checked="" type="radio"/> OK	Inlet Air Temperature: 23 °C Exhaust Air Temperature: 25 °C	Chassis Fans: 6 / 6 (Installed / Maximum) PSU Fans: Not Supported
Storage	<input type="radio"/> Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks: 6 / 6 (Installed / Maximum)
Networking	<input checked="" type="radio"/> OK		Ethernet NICs: 4 (Installed)

Oracle ILOM のネットワーク設定の変更

このセクションの手順では、Oracle ILOM のネットワーク設定を変更する方法について説明します。

- Oracle ILOM CLI からネットワーク設定を変更するには、56 ページの「Oracle ILOM CLI でのネットワーク設定の変更」を参照してください。
- リモートでログインするには、サーバー SP に割り当てられた IP アドレス、ホスト名、または IPv6 ローカルリンク名を使用し、61 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更」の手順に従います。

▼ Oracle ILOM CLI でのネットワーク設定の変更

Oracle ILOM CLI から、現在構成されているサーバーのネットワーク設定を変更するには、次の手順に従います。

注 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、『Sun Server X4-4 サービスマニュアル』の「BIOS 設定ユーティリティにアクセスする」を参照してください。

- 1 53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」または 54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」の関連する方法を使用して、Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 ネットワーク環境に適合するネットワーク構成手順を実行し、ネットワーク設定をテストします。
 - IPv4 ネットワーク設定を確認または構成するには、手順 3 と手順 4 を実行します。
 - IPv6 ネットワーク設定を確認または構成するには、手順 5 から 8 までを実行します。
- 3 IPv4 ネットワーク構成の場合、`cd` コマンドを使用して `/SP/network` ディレクトリに移動します。
-> `cd /SP/network`
- 4 次のいずれかを実行します。
 - ネットワーク上に DHCP サーバーがある場合、次のコマンドを入力し、DHCP サーバーがサーバーに割り当てた設定を表示します。
-> `show`
 - DHCP サーバーがない場合、または設定を割り当てる場合、`set` コマンドを使用し、次の表にあるプロパティの値を割り当てます。例:
-> `set pendingipdiscovery=static`
-> `set pendingipaddress=10.8.183.106`
-> `set pendingipnetmask=255.255.255.0`
-> `set pendingipgateway=10.8.183.254`
-> `set commitpending=true`

プロパティ	設定値	説明
state	enabled または disabled	ネットワークの状態はデフォルトで enabled に設定されています。SP へのネットワーク接続を無効にすることは、シリアル管理ポート経由でしか Oracle ILOM にアクセスできないことを意味します。
pendingipdiscovery	static または dhcp	ネットワーク検出オプションには、静的 IP アドレスの場合は static、DHCP サーバーによって割り当てられた IP アドレスの場合は dhcp (デフォルト) が含まれます。
pendingipaddress	<ip_address>	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるには、各プロパティ (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) に対して set コマンドと割り当てる静的な値を入力します。
pendingipnetmask	<netmask>	
pendingipgateway	<gateway>	
commitpending	true	set commitpending=true と入力し、変更をコミットします。

注 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、commitpending を true に設定してネットワーク設定の変更をコミットすると、Oracle ILOM 接続が切断されるので、この新しい設定を使用してログインし直す必要があります。

IPv4 または IPv6 ネットワーク設定をテストするには、手順 9 を参照します。

- IPv6 ネットワーク構成の場合、cd コマンドを使用して SP/network/ipv6 ディレクトリに移動します。

```
-> cd SP/network/ipv6
```

- show コマンドを入力して、デバイスで構成された IPv6 ネットワーク設定を表示します。

次の例は、サーバーの SP デバイス上の各 IPv6 プロパティのサンプル出力の値です。

```
-> show
/SP/network/ipv6
Targets:
```

```
Properties:
state = enabled
autoconfig = stateless
dhcpv6_server_duit = (none)
link_local_ipaddress = fe80::214:4fff:feca:5f7e/64
static_ipaddress = ::/128
ipgateway = fe80::211:5dff:febe:5000/128
pending_static_ipaddress = ::/128
dynamic_ipaddress_1 fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64
```

Commands:

```
cd
show
```

- 7 IPv6 自動構成オプションを構成するには、**set** コマンドを使用して、次の自動構成プロパティの値を指定します。例:

```
-> set state=enabled
```

```
-> set autoconfig=dhcpv6_stateless
```

プロパティ	設定値	説明
state	enabled または disabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 自動構成オプションを有効にするには、この state が enabled に構成されている必要があります。
autoconfig	次の値を指定できません。	このコマンドに続けて、autoconfig の設定値を指定します。
	stateless	<ul style="list-style-type: none"> stateless (デフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから学習した IP アドレスを自動的に割り当てます。
	dhcpv6_stateless	
	dhcpv6_stateful	<ul style="list-style-type: none"> dhcpv6_stateless DHCPv6 サーバーから学習した DNS 情報を自動的に割り当てます。dhcpv6_stateless プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。
	disable	<ul style="list-style-type: none"> dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから学習した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。dhcpv6_stateful プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 disable 自動構成プロパティの値をすべて無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティの値を設定します。

注 - IPv6 構成オプションは、設定後に有効になります。/network ターゲットでこれらの変更を確定する必要はありません。

注 - stateless 自動構成オプションを有効にすると、dhcpv6_stateless のオプションが有効になったとき、または dhcpv6_stateful のオプションが有効になったときに、それと同時に実行できます。ただし、dhcpv6_stateless 自動構成オプションと dhcpv6_stateful 自動構成オプションを同時に有効にしないでください。

8 静的IPv6アドレスを設定するには、次の手順を実行します。

a. プロパティタイプを指定します。例:

-> **set state=enabled**

-> **set pending_static_ipaddress=fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64**

プロパティ	設定値	説明
state	enabled または disabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。静的 IP アドレスを有効にするには、この状態を enabled に設定する必要があります。
pending_static_ipaddress	<ipv6_address>/ <subnet_mask_length_in_bits>	このコマンドに続けて、デバイスに割り当てる静的 IPv6 アドレスおよびネットマスクのプロパティ値を入力します。IPv6 のアドレス例: fec0:a:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

b. 次のコマンドを入力して、保留中の IPv6 静的ネットワークパラメータを確定します。

-> **set /SP/network commitpending=true**

注 - ネットワーク設定は、確定するまで保留されます。サーバーに新しい静的 IP アドレスを割り当てると、サーバーとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいセッションを作成する必要があります。

9 ネットワークテストツール (Ping および Ping6) を使用して、Oracle ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストします。

詳細は、62 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

▼ Oracle ILOM Web インタフェースでのネットワーク設定の変更

Oracle ILOM Web インタフェースから、現在構成されているサーバーのネットワーク設定を変更するには、次の手順に従います。

注 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、『Sun Server X4-4 サービスマニュアル』の「BIOS 設定ユーティリティにアクセスする」を参照してください。

- 1 54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」の関連の手順を使用して、Oracle ILOM の Web インタフェースにログインします。
- 2 左側のナビゲーションツリーから、「ILOM Administration」>「Connectivity」と選択します。
「Network Settings」ページが表示されます。デバイスで構成された設定が表示されず。

- 3 使用しているネットワーク環境に当てはまるネットワーク構成手順を実行します。
 - IPv4: ネットワーク上の DHCP サーバーにネットワーク設定の割り当てを許可するには、「DHCP」ラジオボタンが選択されていることを確認して、「Save」をクリックします。

- **IPv4:** ネットワーク設定を割り当てるには、「**Static**」ラジオボタンを選択して、「**IP Address**」、「**Netmask**」、および「**Gateway**」フィールドに入力し、「**Save**」をクリックします。
- **IPv6:** 自動構成オプションを構成するには、「**State**」プロパティの横にある「**Enabled**」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、自動構成値を選択して「**Save**」をクリックします。

注- 「Autoconfig Stateless」オプションを有効にすると、「DHCPv6 Autoconfig Stateless」のオプションが有効になったとき、または「DHCPv6 Autoconfig Stateful」のオプションが有効になったときに、それと同時に実行できます。

- **IPv6:** 静的IPv6アドレスを設定するには、「**State**」プロパティの横にある「**Enabled**」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、「**Static IP Address**」フィールドに *ipv6_address/subnet mask length in bits* の形式の静的アドレス (例: **fec0:a:8:b7:214:4f ff:feca:5f7e/64**) を入力し、「**Save**」をクリックします。
- 4 ネットワークテストツール (Ping および Ping 6) を使用して、Oracle ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストします。
- 詳細は、64 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

Oracle ILOM のネットワーク設定のテスト

このセクションの手順では、Oracle ILOM のネットワーク設定をテストする方法について説明します。

- Oracle ILOM CLI からネットワーク設定をテストするには、62 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。
- Oracle ILOM の Web インタフェースからネットワーク設定をテストするには、64 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

- 1 **cd** コマンドを使用して、`/SP/network/test` ディレクトリに移動します。
-> **cd /SP/network/test**

- 2 CLI プロンプトで **show** コマンドを入力して、ネットワークの **test** ターゲットとプロパティを表示します。

たとえば、次の出力は、**test** ターゲットプロパティを示しています。

```
-> show
/SP/network/test
Targets:

Properties:
 ping = (Cannot show property)
 ping6 = (Cannot show property)

Commands:
 cd
 set
 show
```

- 3 **set ping** または **set ping6** コマンドを使用して、ネットワークテストをデバイスからネットワークの宛先に送信します。例:

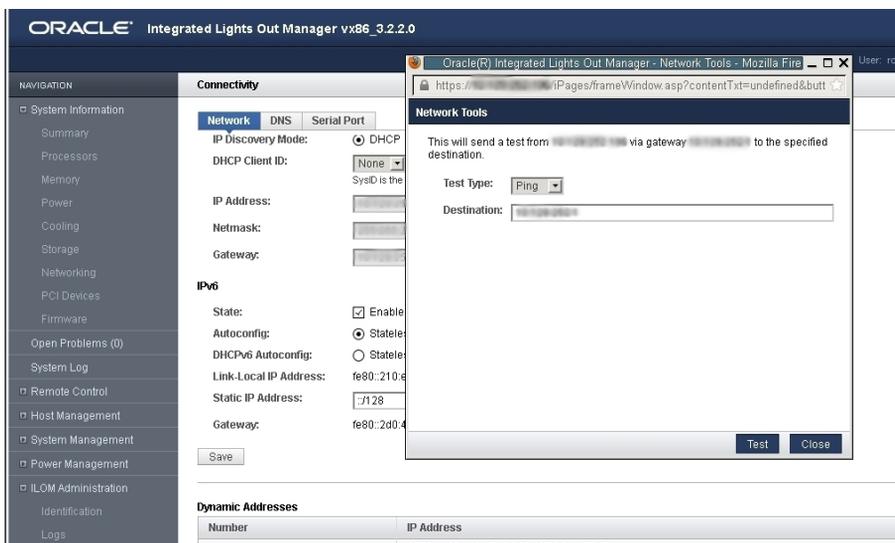
```
-> set ping=device_ipv4_address_on network
```

```
-> set ping6=device_ipv6_address_on network
```

プロパティ	設定値	説明
ping	<IPv4_address>	コマンドプロンプトで set ping= コマンドを入力し、続けて IPv4 テストの宛先アドレスを入力します。例: set ping=10.8.183.106 Ping of 10.8.183.106 succeeded
ping6	<IPv6_address>	set ping6= コマンドの後に、IPv6 テストの宛先アドレスを入力します。例: set ping6=fe80::211:5dff:febe:5000 Ping of fe80::211:5dff:febe:5000 succeeded

▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

- 1 「ILOM Administration」 > 「Connectivity」 ページで、ページ最下部の「Tools」 ボタンをクリックします。
「Network Configuration Test」 画面が表示されます。



- 2 「Test Type」 リストボックスから「Ping」または「Ping6」を選択します。
IPv4 ネットワーク構成用の Ping テストを選択します。IPv6 ネットワーク構成用の Ping6 テストを選択します。
- 3 IPv4 または IPv6 テストの宛先アドレスを「Destination」フィールドに入力して、「Test」をクリックします。
テストに成功すると、「Network Configuration Test」画面の「Destination」フィールドの下に「Ping of ip_address succeeded」というメッセージが表示されます。

▼ Oracle ILOM の終了

- Oracle ILOM セッションを終了するには:
 - Oracle ILOM CLI の CLI プロンプトで、**exit** と入力します。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、ページの右上隅にある「**Log Out**」ボタンをクリックします。

サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング

このセクションでは、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) に関して発生する可能性のある次の2つの問題の対処方法を示します。

- Oracle ILOM SP がハングアップしたためリセットする必要がある。
- システム管理者が root アカウントのパスワードを忘れてしまったため、回復する必要がある。

これらの問題の対処手順については、次の各セクションを参照してください。

- 65 ページの「[Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット](#)」
- 66 ページの「[SP リセットスイッチを使用したサービスプロセッサのリセット](#)」
- 66 ページの「[root アカウントのパスワードの回復](#)」

▼ Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット

始める前に サービスプロセッサをリセットするには、Host Control and Reset (r) の役割が必要です。

- 1 53 ページの「[ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン](#)」または 54 ページの「[リモート Ethernet 接続を使用した Oracle ILOM へのログイン](#)」の関連する方法を使用して、Oracle ILOM にログインします。
- 2 次のいずれかの方法を使用して、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) をリセットします。
 - **Oracle ILOM CLI** から、次のコマンドを入力します。
`reset /SP`
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「**Administration**」 > 「**Maintenance**」 > 「**Reset SP**」の順にクリックします。

注 - Oracle ILOM SP をリセットすると、現在の Oracle ILOM セッションが切断されます。Oracle ILOM での作業を続けるには、再度ログインする必要があります。

SP リセットスイッチを使用したサービスプロセッサのリセット

Oracle ILOM SP がハングアップして、Oracle ILOM の Web インタフェースまたは Oracle ILOM CLI コマンドを使用してリセットできない場合は、サーバーにあるピンホールのリセットスイッチを使用できます。このスイッチの位置と使用については、『[Sun Server X4-4 サービスマニュアル](#)』を参照してください。

▼ root アカウントのパスワードの回復

システム管理者は、必要に応じて、構成済みの Oracle ILOM デフォルトパスワードを使用して、構成済みの Oracle ILOM ローカル root アカウントまたはそのローカル root アカウントのパスワードを復旧できます。

root アカウントのパスワードを回復するには、Oracle ILOM に対するローカルのシリアル管理ポート (SER MGT) 接続が必要です。また、Oracle ILOM で Physical Presence State が有効になっている場合 (デフォルト)、ユーザーは自分がサーバーの前にいることを証明する必要があります。

root アカウントまたは root アカウントのパスワードを回復するには、次の手順を実行します。

- 1 **Oracle ILOM** へのローカルのシリアル管理接続を確立し、デフォルトのユーザーアカウントを使用して **Oracle ILOM** にログインします。例:

```
SUNSP-000000000 login: default
```

Press and release the physical presence button

Press return when this is completed...

シリアル管理ポート経由のログインの追加情報については、[53 ページ](#)の「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」を参照してください。

- 2 サーバーの前に自分がいることを証明します。
サーバーの前に自分がいることを証明するには、サーバー前面の位置特定ボタンを押します。
位置特定ボタンの位置については、[13 ページ](#)の「フロントパネルの機能」を参照してください。
- 3 シリアルコンソールに戻って、**Enter** を押します。
パスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
- 4 デフォルトユーザーアカウントのパスワード **defaultpassword** を入力します

- 5 アカウントのパスワードをリセットするか、**root**アカウントを作成し直します。

Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定

Oracle System Assistant はシステムのソフトウェアとファームウェアの設定に適したアプリケーションです。Oracle System Assistant は、一部の Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うための組み込みのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle Solaris、Linux、Oracle VM、または Windows オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、サーバーハードウェアの構成を行うことができます。

注 - Oracle Solaris インストールの場合、Oracle System Assistant は推奨されるドライバまたはツールの追加インストールを行いません。Oracle Solaris OS の更新は、Oracle Solaris パッケージ更新ソフトウェアを使用して実施されます。Linux、Oracle VM、および Windows の場合、Oracle System Assistant は推奨されるドライバやツールのうち、その特定のオペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアでサポートされているものを追加でインストールします。

Oracle System Assistant を使ってオペレーティングシステムをインストールする際にインストール可能なオプションソフトウェアの一覧については、Oracle System Assistant の ReadMe を参照してください。

このセクションでは、次のように、Oracle System Assistant を使用して、サーバーのソフトウェアおよびファームウェアを設定する方法について説明します。

説明	リンク
Oracle ILOM から Oracle System Assistant をリモートで起動します。	70 ページの「Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する」
Oracle System Assistant をローカルで起動します。	72 ページの「Oracle System Assistant をローカルで起動する」

関連項目

- Oracle System Assistant の使用に関する追加情報は、『Oracle X4 シリーズ サーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。

▼ Oracle ILOM の Web インタフェースを使用して Oracle System Assistant を起動する

始める前に あらかじめ Oracle ILOM をリモート Ethernet アクセス用に設定してください
51 ページの「Oracle ILOM への接続」

- 1 サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
サーバースタンバイモードでは、電源/OK インジケータがゆっくり点滅します。電源/OK インジケータの位置については、13 ページの「フロントパネルの機能」を参照してください。
- 2 サーバー SP の Oracle ILOM の Web インタフェースにログインします。
ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの SP の IP アドレスを入力します。
「System Summary」画面が表示されます。

The screenshot shows the Oracle ILOM web interface. The main content area is titled "Summary Information" and displays system details in a table. A "Status" section shows overall system health as "OK". An "Actions" panel on the right contains buttons for "Turn Off", "Turn On", "Launch", and "Update".

General Information	
System Type	Rack Mount
Model	System13
QPart ID	Q10542
Part Number	X4-4-PPN
Serial Number	X4-4-PPN
Component Model	X4-4
Component Part Number	X4-4-PPN
Component Serial Number	System13
System Identifier	-
System Firmware Version	x86_3.2.2.0
Primary Operating System	Not Available
Host Primary MAC Address	Not Available
ILOM Address	Not Available
ILOM MAC Address	00:1D:E0:2E:45:7A

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: Four Intel Xeon Processor E7 V2 Series	Processors: 4 / 4 (Installed / Maximum)
Memory	OK	Installed RAM Size: 256 GB	DIMMs: 32 / 96 (Installed / Maximum)
Power	OK	Permitted Power Consumption: 1607 watts Actual Power Consumption: 403 watts	PSUs: 2 / 2 (Installed / Maximum)
Cooling	OK	Inlet Air Temperature: 23 °C Exhaust Air Temperature: 25 °C	Chassis Fans: 6 / 6 (Installed / Maximum) PSU Fans: Not Supported
Storage	Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks: 6 / 6 (Installed / Maximum)
Networking	OK		Ethernet NICs: 4 (Installed)

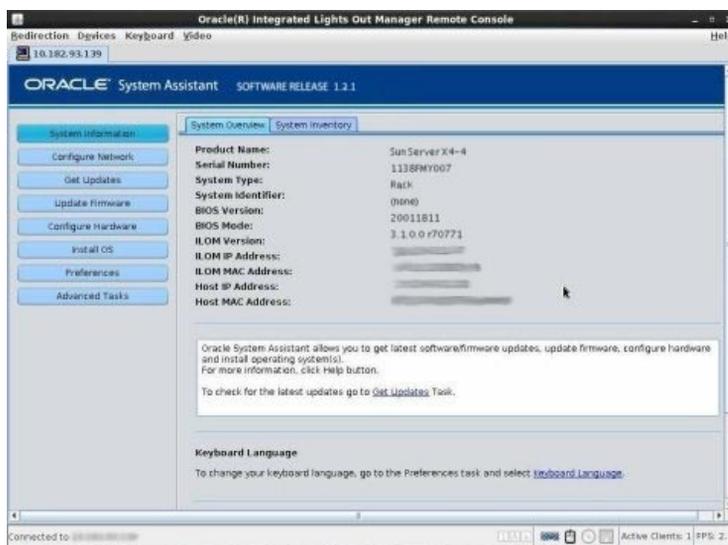
- 3 右上パネルにある Oracle System Assistant の「Launch」ボタンをクリックします。

注-システムがスタンバイモードになっていなくても、完全に電力が投入されている場合は、最初に停止するよう求められます。139 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止」を参照してください。システムの電源が切断されてから、この手順を続行してください。

4 Oracle System Assistant の起動を続行するには、「Yes」をクリックします。

サーバーが初期化されるまで待機します。これには数分かかる場合があります。

- サーバーの電源が投入されます。
- Oracle System Assistant アプリケーションがブートします。
- Oracle System Assistant のメイン画面が表示されます。



5 Oracle System Assistant を使用して、次の表に示した順番でタスクを実行します。

Oracle System Assistant の使用の詳細は、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』または Oracle System Assistant の組み込みのヘルプを参照してください。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面
1	Oracle System Assistant ネットワーク接続を設定します。	Network Configuration

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面
2	最新のソフトウェアとファームウェアの更新を入手します。	Get Updates
3	Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクステンダ、HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。	Update Firmware
4	Oracle ILOM を構成します。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」
5	RAID を構成します。 注-インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。	「Configure Hardware」 > 「RAID Configuration」 このタスクの実行の詳細は、79 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」にリストされています。
6	Oracle System Assistant の「Install OS」ウィザードを使用して、オペレーティングシステムをインストールします。サポートされているオペレーティングシステムには、Oracle Solaris、Linux、Windows、または Oracle VM ソフトウェアが含まれます。 注-インストール済みの OS がシステムに付属していた場合は、このオプションを使用しないでください。	Install OS

次の手順 ■ [77 ページの「OS インストール用のサーバードライブの構成」](#)

▼ Oracle System Assistant をローカルで起動する

ローカルでの Oracle System Assistant の起動を開始する前に、実際に Sun Blade X4-4 の近くにおいて、次に対するアクセス権を保有している必要があります。

- VGA モニター
- USB キーボード
- USB マウス

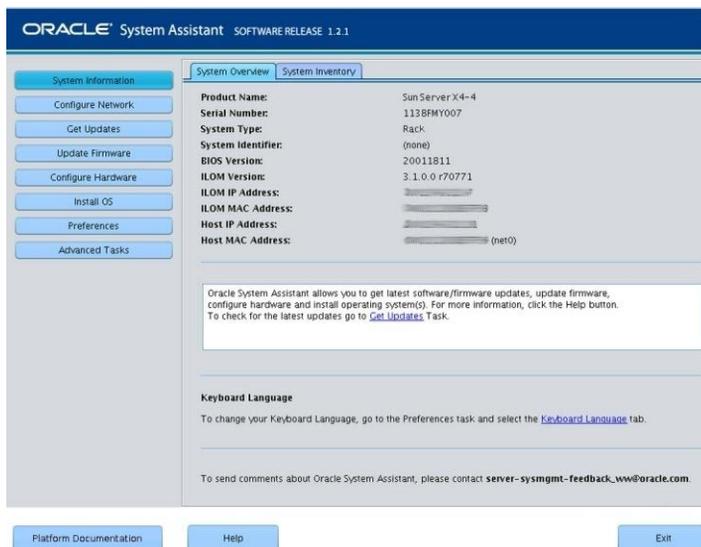
次のセクションの説明に従って、サーバードライブでローカルに Oracle System Assistant を起動する方法を選択します。

- 1 サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
電源/OK インジケータがゆっくり点滅していることを確認します。13 ページの「フロントパネルの機能」を参照してください。

- 2 サーバーにローカル接続します。
53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用した Oracle ILOM へのログイン」を参照してください。
- 3 フロントパネルの電源ボタンを押して、サーバーに電力を投入し全電力モードにします。
 - サーバーがブートします。
 - モニターに POST メッセージが表示されます。
- 4 Oracle System Assistant の POST メッセージが表示されたら、F9 ファンクションキーを押します。



- Oracle System Assistant がブートします。
- Oracle System Assistant のメイン画面が表示されます。



- 5 **Oracle System Assistant** を使用して、次の表に示した順番でタスクを実行します。Oracle System Assistant の使用の詳細については、「Help」ボタンをクリックするか、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面
1	Oracle System Assistant ネットワーク接続を設定します。	Network Configuration
2	最新のソフトウェアとファームウェアの更新を入手します。	Get Updates
3	Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクスパンダ、HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。	Update Firmware
4	Oracle ILOM を構成します。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」
5	RAID を構成します。 注-インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。	「Configure Hardware」 > 「RAID Configuration」 このタスクの実行の詳細は、79 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」にリストされています。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面
6	<p>Oracle System Assistant の「Install OS」ウィザードを使用して、オペレーティングシステムをインストールします。サポートされているオペレーティングシステムには、Oracle Solaris、Linux、Windows、または Oracle VM ソフトウェアが含まれます。</p> <p>注-インストール済みの OS がシステムに付属していた場合は、このオプションを使用しないでください。</p>	Install OS

次の手順 ■ [77 ページの「OS インストール用のサーバードライブの構成」](#)

OS インストール用のサーバードライブの構成

このセクションでは、オペレーティングシステムのインストール用のサーバードライブの構成および RAID の構成方法について説明します。

説明	リンク
ストレージドライブ構成オプションについて学習します。サポートされるオプションは、サーバーのホストバスアダプタ (HBA)、RAID の要件、およびインストール済みの OS があるかどうかによって異なります。	77 ページの「ドライブ構成オプション」
Oracle System Assistant を使用してサーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	79 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」
BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用してサーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	90 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用した RAID の構成」
オペレーティングシステムインストールと更新タスクについて学習します。	101 ページの「オペレーティングシステムおよびドライブの設定」

ドライブ構成オプション

オペレーティングシステム (OS) のブートデバイスにするシステムドライブの準備は、サーバー設定プロセスの重要な手順です。RAID の構成に使用する手順は、サポートされているどちらの SAS HBA がサーバーに取り付けられているか、どちらのサーバー BIOS ブートモード (UEFI またはレガシー、詳細は [22 ページの「UEFI BIOS」](#) を参照) が選択されているかに応じて異なります。RAID の構成には、Oracle System Assistant (推奨) または BIOS/オプション ROM ベースの RAID 構成ユーティリティーのいずれかを使用できます。オペレーティングシステムをインストールしたら、サーバーに付属のサポートされている OS ベースの RAID 管理ユーティリティーを使用して RAID ストレージドライブを管理できます。

サーバーストレージドライブを構成するためのオプションを選択します。

- オプション1-オプションの出荷時にインストール済みのOSまたは仮想マシンソフトウェアイメージを購入した場合は、イメージを含むブートドライブがあらかじめ作成されています。インストール済みのOSイメージを含むディスクはインストール済みのイメージを破壊するため、RAIDボリュームとしては構成できません。インストール済みのOSイメージを含むシステムの場合は、次のセクションのいずれかに進んでください。
 - 103 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
 - 111 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」
 - 117 ページの「インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成」
- オプション2-OSを新規インストールする場合で、複数のサーバストレージドライブを使用して1つ以上のRAIDボリュームを構成するときは、OSをインストールする前にサーバのストレージドライブでRAIDボリュームを構成する必要があります。
 - サーバに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、79 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」に進んで、サーバに取り付けられている内蔵 HBA に一致するタスクを選択します。
 - サーバに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、90 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」に進んでください。
- オプション3-サーバに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (SGX-SAS6-R-INT-Z) が取り付けられており、OSの新規インストールを行うが、複数のストレージドライブでRAIDボリュームを構成しません。このオプションでは、単一のストレージドライブでRAID0ボリューム(「仮想ディスク」とも呼ばれます)を構成して、そのボリュームをブート可能にする必要があります。
 - サーバに Oracle System Assistant が組み込まれている場合は、84 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成」に進んで、単一ストレージドライブ上にRAID0ボリュームを構成します。
 - サーバに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、92 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成」に進んで、単一ストレージドライブ上にRAID0ボリュームを構成します。

注-オプション3を選択する場合は、単一のストレージドライブでRAID0ボリュームを構成して、そのボリュームをブート可能にする必要があります。そうしないと、内蔵 HBA がストレージドライブを特定できなくなります。

- オプション4-サーバに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA (SGX-SAS6-INT-Z) が取り付けられており、OSの新規インストールを行うが、サーバのストレージドライブでRAIDボリュームを構成しません。このオプションについては、インストールするOSのインストールガイドを参照してください。

- 『Sun Server X4-4 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』
- 『Sun Server X4-4 Linux オペレーティングシステムインストールガイド』
- 『Sun Server X4-4 Oracle VM インストールガイド』
- 『Sun Server X4-4 Microsoft Windows オペレーティングシステムインストールガイド』
- 『Sun Server X4-4 VMware ESXi インストールガイド』

Oracle System Assistant を使用した RAID の構成

Oracle System Assistant を使用して、サーバー上に RAID を構成します。サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていない場合は、BIOS ユーティリティを使用して RAID を構成できます。

次の手順を参照してください。

- 79 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した RAID の構成」
- 84 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成」

▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA を使用した RAID の構成

ブート可能な RAID 0 ボリュームを作成することによって OS インストール用のサーバーハードドライブを準備するには、Oracle System Assistant を使用します。

始める前に あらかじめ BIOS 設定ユーティリティから BIOS ブートモード (UEFI またはレガシー) を選択してください。

注 - RAID 構成に使用される BIOS ブートモードは、オペレーティングシステムをインストールするときに使用するモードに一致する必要があります。一致していないと、RAID 構成を表示することも使用することもできません。

サポートされているすべてのオペレーティングシステムが UEFI モードをサポートしているわけではありません。UEFI モードをサポートしているオペレーティングシステムのリストについては、22 ページの「UEFI BIOS」を参照してください。

BIOS ブートモードを、UEFI からレガシー BIOS、またはレガシー BIOS から UEFI に切り替える手順については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。

1 Oracle System Assistant を起動します。

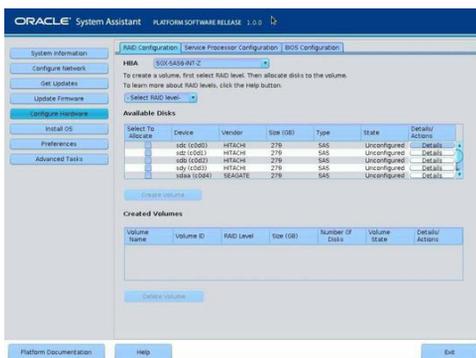
69 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」を参照してください。

Oracle System Assistant の「System Overview」画面が表示されます。



- 2 「Configure Hardware」 ボタンをクリックして、「RAID Configuration」タブを選択します。

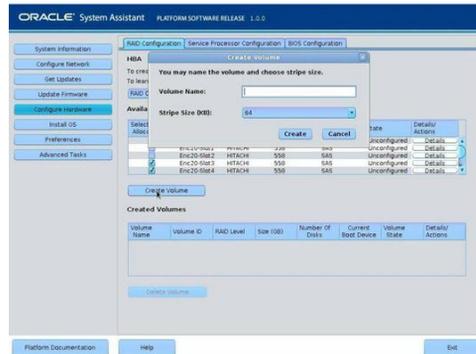
「RAID Configuration」画面が表示されます。



- 3 「HBA」 リストボックスで「SGX-SAS6-INT-Z HBA」を選択します。これは、Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA です。
- 4 「Select RAID Level」 リストボックスで、「RAID-0」を選択します。

- 5 「Available Disks」テーブルで、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択し、「Create Volume」ボタンをクリックします。

「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



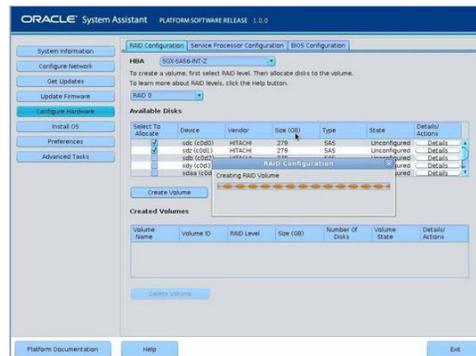
- 6 「Create Volume」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。

- a. (オプション)ボリューム名を入力します。

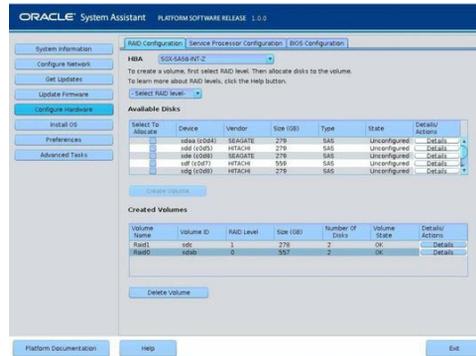
ボリューム名の入力オプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。

- b. 「Create」をクリックします。

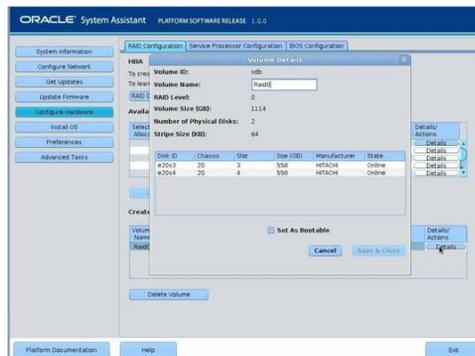
「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。



ボリュームの作成が完了すると、「Created Volumes」表にボリュームが表示されます。



- 7 「Created Volumes」表の「Details/Action」列で「Details」ボタンをクリックします。「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。

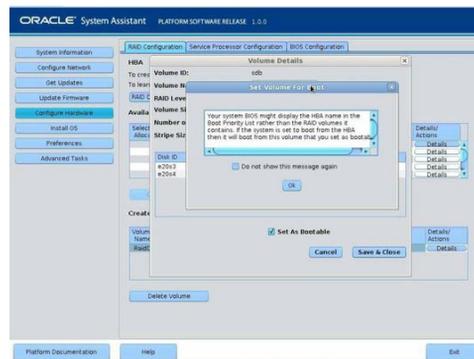


- 8 「Volume Details」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。
- ボリュームの詳細を確認します。
 - (オプション) 「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力するか、変更します。

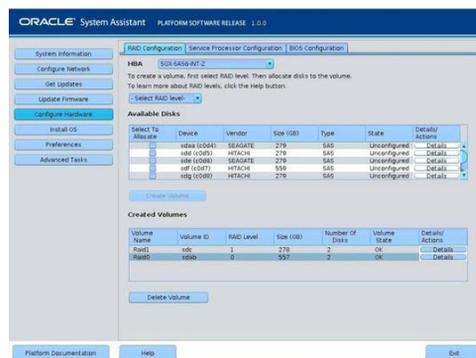
以前にボリューム名を入力していない場合は、「Volume Details」ダイアログボックスでもう一度入力する機会が得られます。以前にボリューム名を入力した場合、それをここで変更することはできませんが、その名前全体を削除することはできません。

注-ボリューム名を付けるかはオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックしていつでもボリューム名を変更できますが、ボリューム名をいったん割り当てたあとで削除することはできません。

- c. 「Set As Bootable」ボックスにチェックマークを付けます。
- d. 「Save & Close」をクリックします。
「Set Volume For Boot」確認ダイアログが表示されます。



- 9 「OK」をクリックします。
「RAID Configuration」画面が表示され、その RAID ボリュームが現在のブートデバイスとして表示されます。



- 10 ボリュームを削除する場合は、そのボリュームを選択してから「Delete Volume」ボタンをクリックします。
これで RAID 構成タスクが完了します。

11 次のいずれかを実行します。

- ほかの任意の **Oracle System Assistant** タスクを選択するには、左側のパネルメニューで対応するボタンをクリックします。たとえば、RAID の構成後であれば、「Install OS」タスクを選択してオペレーティングシステムのインストールを実行することをお勧めします。
- **Oracle System Assistant** の「**System Overview**」画面に戻るには、左側のメニューパネルで「System Information」をクリックします。
- **Oracle System Assistant** を終了するには、「Exit」をクリックします。

次の手順 ■ 101 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

▼ Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用した RAID の構成

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA を使用したシステムでは、Oracle からのインストール済みの OS を使用しない場合は、OS をインストールする前にブート可能なボリュームを作成する必要があります。ドライブに Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA によって作成されたボリュームがない場合、システムはドライブを認識しません。

ブートドライブとして使用する予定のドライブに複数のボリュームがある場合は、OS のインストール先ボリュームをブートデバイスとして設定する必要があります。

始める前に あらかじめ BIOS 設定ユーティリティーから BIOS ブートモード (UEFI またはレガシー) を選択してください。

注 - RAID 構成に使用される BIOS ブートモードは、オペレーティングシステムをインストールするときに使用するモードに一致している必要があります。一致していないと、RAID 構成を表示することも使用することもできません。

サポートされているすべてのオペレーティングシステムが UEFI モードをサポートしているわけではありません。UEFI モードをサポートしているオペレーティングシステムのリストについては、22 ページの「**UEFI BIOS**」を参照してください。

BIOS ブートモードを、UEFI からレガシー BIOS、またはレガシー BIOS から UEFI に切り替える手順については、『**Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド** (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。

1 Oracle System Assistant を起動します。

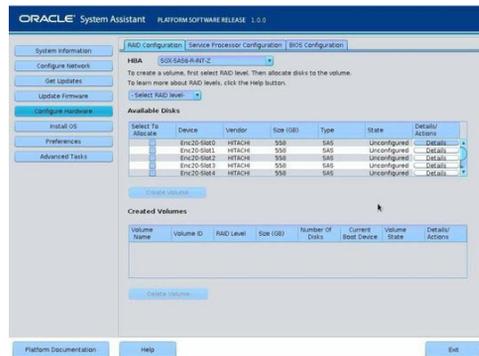
69 ページの「Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定」を参照してください。

Oracle System Assistant の「System Overview」画面が表示されます。



2 「Configure Hardware」 ボタンをクリックして、「RAID Configuration」タブを選択します。

「RAID Configuration」画面が表示されます。



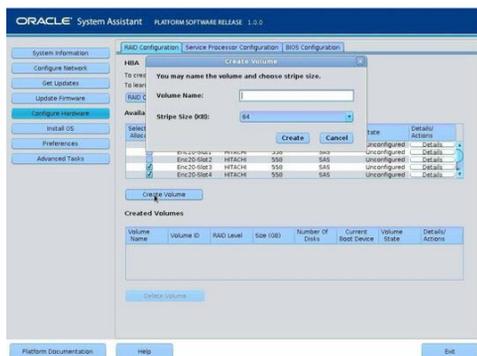
3 「HBA」 リストボックスで「SGX-SAS6-R-INT-ZHBA」を選択します。

これは、Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA です。

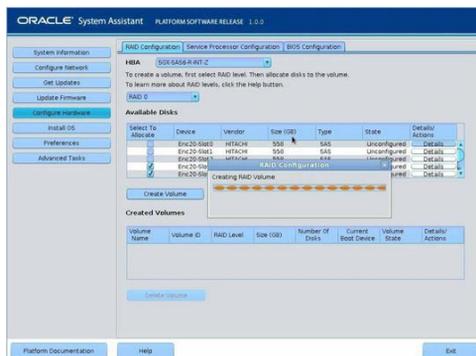
4 「Select RAID Level」 リストボックスで、目的の RAID レベルを選択します。

Oracle System Assistant は、RAID-0、RAID-1、および RAID-10 をサポートしています。

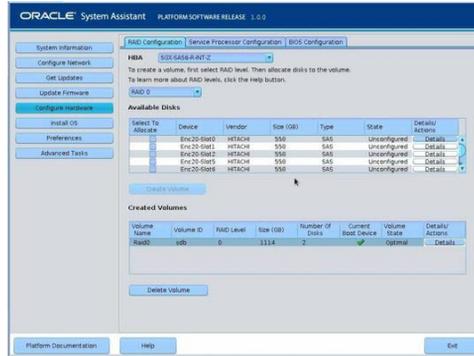
- 5 「Available Disks」テーブルで、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択し、「Create Volume」ボタンをクリックします。
「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



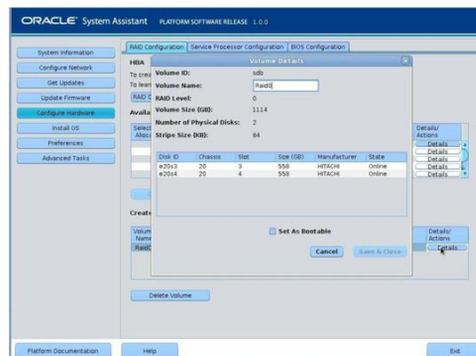
- 6 「Create Volume」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。
- (オプション)ボリューム名を入力します。
ボリューム名の入力はおプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。
 - ボリュームのストライプサイズを選択します。
 - 「Create」をクリックします。
「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。



ボリュームの作成が完了すると、「Created Volumes」表にボリュームが表示されます。



- 7 「Created Volumes」表の「Details/Action」列で「Details」ボタンをクリックします。「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。

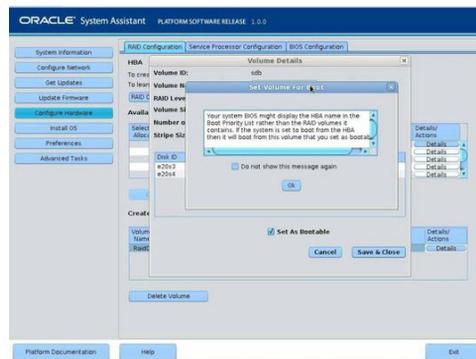


- 8 「Volume Details」ダイアログボックスで、次の手順を実行します。
 - a. ボリュームの詳細を確認します。
 - b. (オプション) 「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力するか、変更します。

以前にボリューム名を入力していない場合は、「Volume Details」ダイアログボックスでもう一度入力する機会が得られます。以前にボリューム名を入力した場合、それをここで変更することはできませんが、その名前全体を削除することはできません。

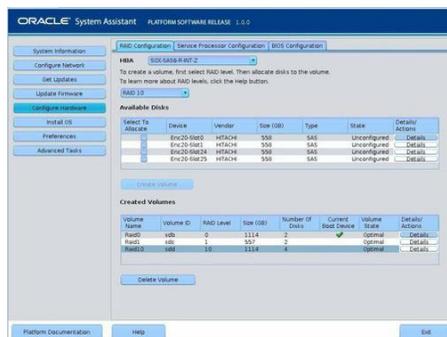
注-ボリューム名を付けるかはオプションです。ボリュームに名前を付けなかった場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックしていつでもボリューム名を変更できますが、ボリューム名をいったん割り当てたあとで削除することはできません。

- c. 「Set As Bootable」ボックスにチェックマークを付けます。
- d. 「Save & Close」をクリックします。
「Set Volume For Boot」確認ダイアログが表示されます。

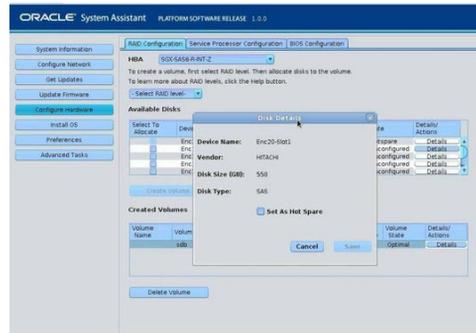


- 9 「OK」をクリックします。

「RAID Configuration」画面が表示され、その RAID ボリュームが現在のブートデバイスとして表示されます。



- 10 作成されたボリュームをグローバルホットスペアとして指定する場合は、次の手順を実行します。それ以外の場合は、[手順 11](#)に進みます。
- a. 「Details/Actions」列で「Details」ボタンをクリックします。
「Disk Details」ダイアログボックスが表示されます。



- b. 「Set as Hot Spare」ボックスにチェックを入れます。

注 - Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA では最大 256 個のホットスペアを作成できます。

- c. 「Save」をクリックします。
「Disk Details」ダイアログボックスが閉じます。

- 11 ボリュームを削除する場合は、そのボリュームを選択してから「Delete Volume」ボタンをクリックします。
これで RAID 構成タスクが完了します。
- 12 次のいずれかを実行します。
- ほかの任意の **Oracle System Assistant** タスクを選択するには、左側のパネルメニューで対応するボタンをクリックします。たとえば、RAID の構成後であれば、「Install OS」タスクを選択してオペレーティングシステムのインストールを実行することをお勧めします。
 - **Oracle System Assistant** の「System Overview」画面に戻るには、左側のメニューパネルで「System Information」をクリックします。
 - **Oracle System Assistant** を終了するには、「Exit」をクリックします。

次の手順 ■ [101 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」](#)

BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成

Oracle System Assistant を使用できない場合は、HBA ファームウェアに組み込まれている BIOS RAID 構成ユーティリティを使用できます。RAID を構成する手順は、サーバーに搭載されている HBA のタイプに応じて異なります。

これらのユーティリティの使用方法については、次のセクションを参照してください。

- 90 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成」
- 92 ページの「Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成」

関連項目

- 77 ページの「ドライブ構成オプション」
- 79 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成

BIOS RAID 構成ユーティリティは、UEFI BIOS ブートモードまたはレガシー BIOS ブートモードに設定したサーバーでの RAID 構成をサポートします。ブートモードごとに異なるユーティリティが用意されています。

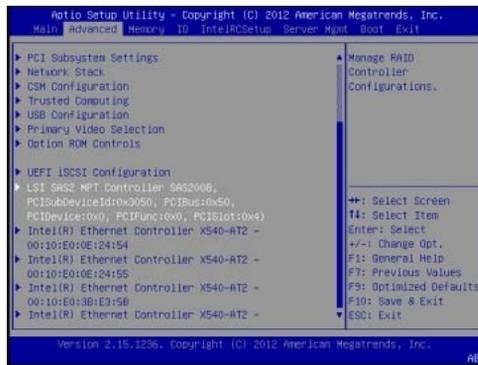
注-オペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアの中には、レガシー BIOS ブートモードしかサポートしないものもあります。UEFI BIOS ブートモードをサポートしているオペレーティングシステムのリストについては、22 ページの「UEFI BIOS」を参照してください。

- 90 ページの「UEFI BIOS ブートモードでの RAID の構成」
- 91 ページの「レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成」

▼ UEFI BIOS ブートモードでの RAID の構成

- 1 サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
たとえば、サーバーをリセットするには、次の手順を実行します。
 - ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押し続けてサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
 - Oracle ILOM Web インタフェースから「Host Management」>「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。

- **Oracle ILOM CLI** で「**reset /System**」と入力します
BIOS 画面が表示されます。
- 2 **BIOS** 画面でプロンプトが表示されたら、**F2**を押して**BIOS** 設定ユーティリティにアクセスします。
しばらくすると、**BIOS** 設定ユーティリティが表示されます。
- 3 右矢印キーを使用して「**Advanced**」メニューに移動します。
「Advanced」メニューが表示されます。
- 4 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「**LSI SAS2 MPT Controller**」メニューオプションに移動して、**Enter** キーを押します。



- 5 **BIOS** 構成ユーティリティを使用して、サーバー上に**RAID**を構成します。
BIOS 構成ユーティリティを使用して UEFI BIOS ブートモードで RAID を構成する方法の手順については、『Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA 設置ガイド (HBA モデル SGX-SAS6-INT-Z および SG-SAS6-INT-Z 対応)』(<http://docs.oracle.com/cd/E19337-01/index.html>) の、x86/64 システムでブート可能ドライブを作成するための手順を参照してください。

次の手順 ■ 101 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

▼ レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成

- 1 サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
たとえば、サーバーをリセットするには、次の手順を実行します。
 - ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押し、サーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。

- Oracle ILOM Web インタフェースから「Host Management」>「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- Oracle ILOM CLI で「reset /System」と入力します

BIOS 画面が表示されます。

- 2 ブートプロセス中に、システム内の、検出された SAS アダプタと、検出された HBA に接続されているデバイスに関する情報が BIOS の初期化バナーに一覧表示されません。
- 3 「Press Ctrl-C to start LSI Corp Configuration Utility...」というプロンプトが表示されたら、すぐに Ctrl+C キーを押して LSI Corp Config Utility にアクセスします。「LSI Corp Config Utility」メニューが表示されます。



- 4 LSI Corp Config Utility を使用して、サーバー上に RAID を構成します。
BIOS 構成ユーティリティを使用してレガシー BIOS ブートモードで RAID を構成する方法については、『Sun Storage 6 Gb SAS PCIe 内蔵 HBA 設置ガイド (HBA モデル SGX-SAS6-INT-Z および SG-SAS6-INT-Z 対応)』(<http://docs.oracle.com/cd/E19337-01/index.html>) で、x86/64 システムでのブート可能ドライブの作成手順を参照してください。

次の手順 ■ 101 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID 内蔵 HBA での BIOS を使用した RAID の構成

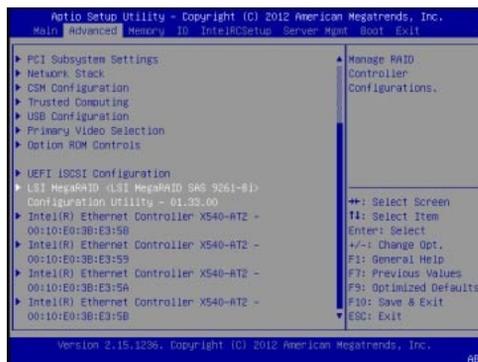
BIOS RAID 構成ユーティリティは、UEFI BIOS ブートモードとレガシー BIOS ブートモードに設定したサーバーでの RAID 構成をサポートします。ブートモードごとに異なるユーティリティが用意されています。

注-オペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアの中には、レガシー BIOS ブートモードしかサポートしないものもあります。UEFI BIOS ブートモードをサポートしていないオペレーティングシステムおよび仮想マシンソフトウェアのリストについては、22 ページの「UEFI BIOS」を参照してください。

- 93 ページの「UEFI BIOS ブートモードでの RAID の構成」
- 97 ページの「レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成」

▼ UEFI BIOS ブートモードでの RAID の構成

- 1 サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
たとえば、サーバーをリセットするには、次の手順を実行します。
 - ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押してサーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
 - Oracle ILOM Web インタフェースから「Host Management」>「Power Control」を選択し、次に「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
 - Oracle ILOM CLI で「reset /System」と入力します
 BIOS 画面が表示されます。
- 2 BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
しばらくすると、BIOS 設定ユーティリティが表示されます。
- 3 右矢印キーを使用して「Advanced」メニューに移動します。
「Advanced」メニューが表示されます。



- 4 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「**LSI MegaRAID Configuration Utility**」メニューオプションに移動して、**Enter** キーを押します。

「**LSI MegaRAID Configuration Utility**」メニューが表示されます。



- 5 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「**Virtual Drive Management**」オプションを選択し、**Enter** キーを押します。

「**Virtual Drive Management**」メニュー画面が表示されます。



- 6 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「**Create Configuration**」オプションを選択し、**Enter** キーを押します。

「Create Configuration」メニュー画面が表示されます。



- 7 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「**Select RAID Level**」オプションを選択し、**Enter** キーを押します。

「Select RAID Level」ダイアログボックスが表示されます。



- 8 上矢印キーと下矢印キーを使用して、目的の RAID レベルを選択し、**Enter** キーを押します。

「Create Configuration」メニュー画面が表示されます。



- 9 上矢印キーと下矢印キーを使用して、「Select Drives」オプションを選択し、**Enter** キーを押します。

「Drive Selection」画面が表示されます。



- 10 「Drive Selection」画面で、メディアタイプ、インタフェースタイプ、RAID 構成に含めるドライブを選択し、「Apply Changes」オプションを選択して、Enter キーを押します。

RAID の「Configuration Confirmation」画面が表示されます。



- 11 「OK」を選択し、Enter キーを押して、RAID の確認を承諾します。これで RAID の構成が完了します。

次の手順 ■ 101 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

▼ レガシー BIOS ブートモードでの RAID の構成

始める前に BIOS RAID 構成ユーティリティは HBA ファームウェアにあります。この手順は、次のいずれかに該当する場合に使用します。

- 特定の OS インストール先ハードドライブ上に RAID を構成する場で、サーバーに Oracle System Assistant が組み込まれていないか、使用しない場合。
- オペレーティングシステムをインストールする予定のストレージドライブを使用して、RAID ボリュームレベル 5、6、50、60 を作成する場合。

注 - Oracle System Assistant は、SGX-SAS6-R-INT-Z HBA に関しては、RAID 0、1、10 しかサポートしていません。

- RAID ボリュームを作成しないが、OS をインストールする目的のハードドライブが初期化されていない場合。

1 1つ以上の RAID ボリューム (仮想ドライブ) を作成します。

次の場所にある MegaRAID SAS ソフトウェアのユーザーズガイドで、WebBIOS 構成ユーティリティを使用したストレージ構成の作成手順を参照してください。

http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx

注 - MegaRAID SAS ソフトウェアのユーザーズガイドには、仮想ドライブをブート可能にするための手順は記載されていません。ドライブをブート可能にするには、仮想ドライブを作成したあとで、このセクションの次の手順に進んでください。

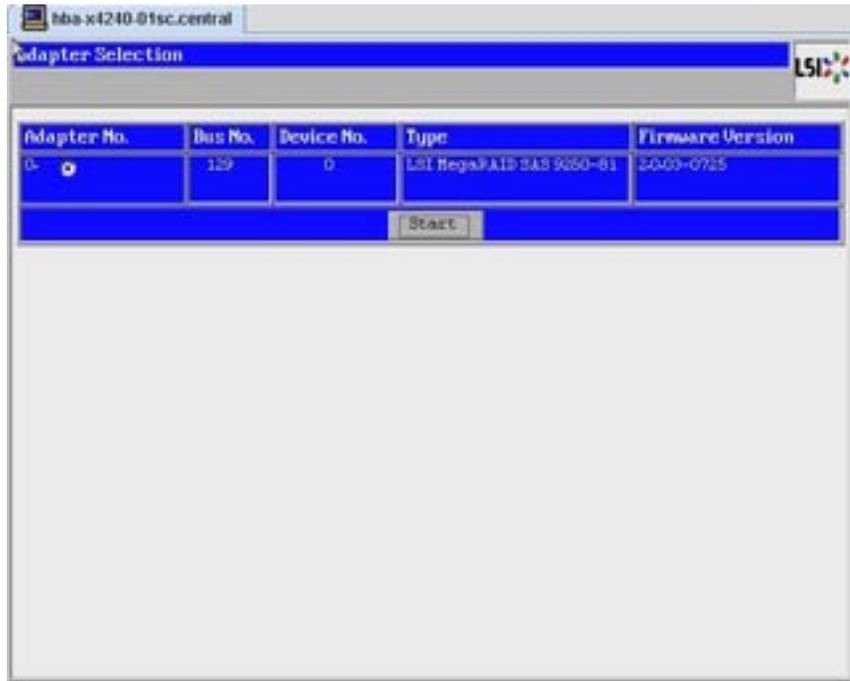
2 仮想ドライブをブート可能にし、まず電源を投入するか、サーバーをリセットします。

たとえば、サーバーをリセットするには、次の手順を実行します。

- ローカルサーバーのフロントパネルにある電源ボタンを約 1 秒押し、サーバーの電源を切り、もう一度電源ボタンを押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースから「**Host Management**」 > 「**Power Control**」を選択し、次に「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- **Oracle ILOM CLI** で「**reset /System**」と入力します

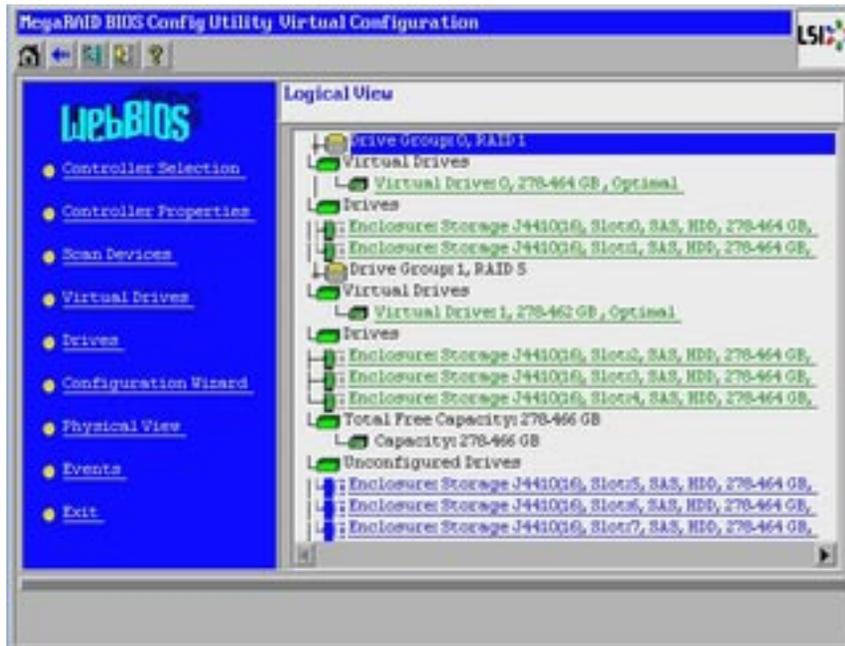
BIOS 画面が表示されます。

- 3 「Press Ctrl<H> for WebBIOS...」というプロンプトが表示されたら、すぐに Ctrl+H キーを押して LSI MegaRAID ユーティリティにアクセスします。
「Adapter Selection」画面が表示されます。

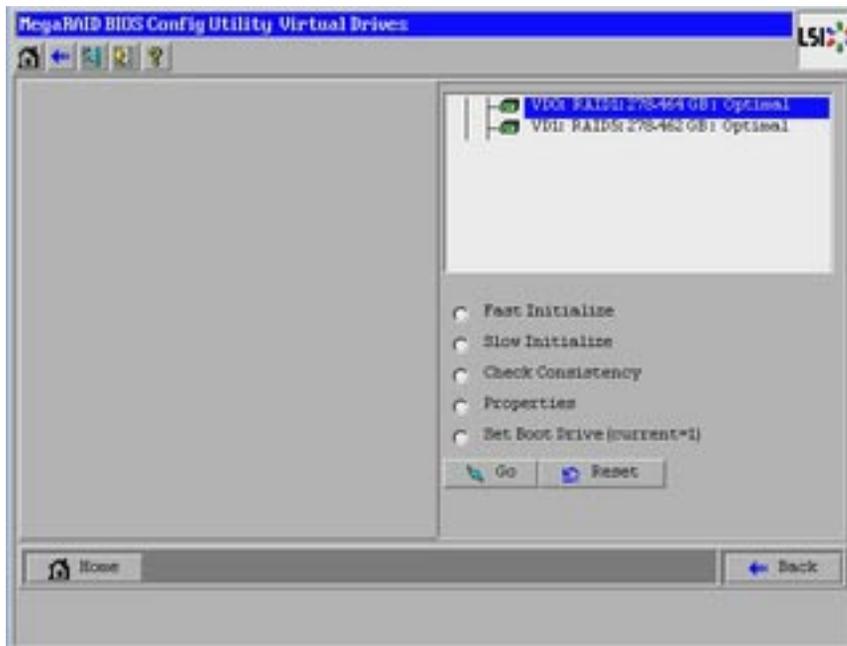


4 「Adapter Selection」画面で「Start」をクリックします。

LSI MegaRAID BIOS Config ユーティリティーの「Virtual Configuration」画面が表示されます。



- 5 「Virtual Drives」をクリックします。
「Virtual Drives」画面が表示されます。



- 6 ブート可能にする仮想ドライブを選択します。
- 7 「Set Boot Drive」をクリックし、「Go」をクリックします。

このタスクの実行方法の詳細は、LSIのMegaRAID SASソフトウェアのユーザーズガイド (http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx) を参照してください。

オペレーティングシステムおよびドライバの設定

インストール済みのオペレーティングシステム(OS)を構成したり、サーバーでサポートされているOSをインストールしたりできます。次の表に、OSのインストールと構成に関する情報の入手方法を示します。

実行するタスク	参照ドキュメント
出荷時にインストール済みの OS を構成する	<ul style="list-style-type: none"> ■ 103 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」 ■ 111 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」 ■ 117 ページの「インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成」
サポートされている OS をインストールし、ドライバを更新する	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Sun Server X4-4 Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-4 Linux オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-4 Oracle VM インストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-4 Microsoft Windows オペレーティングシステムインストールガイド』 ■ 『Sun Server X4-4 VMware ESXi インストールガイド』

インストール済み Oracle Solaris OS の構成

初期リリースでは、Sun Server X4-4 には、サーバーにインストール済みの Oracle Solaris 11.1.x オペレーティングシステム (OS) イメージのオプションがあります。このオプションを購入した場合は、インストール済みソフトウェアを構成することでインストールを終了します。インストール済みの OS イメージには、使用しているサーバーモデルに必要なドライバがすべて組み込まれています。

注 - インストール済み Oracle Solaris OS のサポートされるバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/goto/X4-4/docs> にある『Sun Server X4-4 プロダクトノート』を参照してください。

次のセクションに示す手順を表示されている順番どおりに実行してください。

手順	タスク	リンク
1	使用しているサーバー環境の構成ワークシートに記入します。	103 ページの「Oracle Solaris OS の構成ワークシート」
2	インストール済みの Oracle Solaris OS を構成します。	107 ページの「インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを構成する」
3	Oracle Solaris OS のドキュメントで、Oracle Solaris OS の登録、更新、使用についての情報を確認します。	109 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント」

Oracle Solaris OS の構成ワークシート

インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムの構成を開始する前に、該当する RAID 構成の制限事項を確認してください。次に、Oracle Solaris 構成のワークシートを完成させます。

オペレーティングシステムを構成する前に、次の表の構成ワークシートを使用して、必要な情報を収集します。使用するシステムのアプリケーションに当てはまる情報のみを収集する必要があります。

インストールのための情報	説明または例	回答:デフォルト(*)
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムがネットワークに接続されているかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークに接続されている ■ ネットワークに接続されていない*
DHCP	システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
DHCP を使用しない場合は、ネットワークアドレスを入力します。	<p>IP アドレス</p> <p>DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。</p> <p>例: 192.168.100.1</p>	
サブネット	<p>DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。</p> <p>そうである場合、サブネットのネットマスクは何か。</p> <p>例: 255.255.255.0</p>	255.255.0.0*
IPv6	このマシンで IPv6 を有効にするかどうか。	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティを構成しますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ* <p>「はい」の場合、この情報を収集します。</p> <p>デフォルトレルム:</p> <p>管理サーバー:</p> <p>第 1 KDC:</p> <p>(オプション) 追加の KDC:</p>

インストールのための情報	説明または例	回答:デフォルト(*)
ネームサービス	ネームサービス 該当する場合は、このシステムで使うネームサービスを <input type="text"/> に入力してください。	<ul style="list-style-type: none"> ■ NIS+ ■ NIS ■ DNS ■ LDAP ■ なし*
ドメイン名	システムが所属するドメインの名前を入力します。 <input type="text"/> DNS または NIS	
NIS+ および NIS	NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定しますか、それともインストールプログラムに検索させますか。 NIS を選択した場合: <ul style="list-style-type: none"> ■ NIS ドメインを指定する、または ■ NIS サーバーを指定するか検索するかを指定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 検索する*
DNS	DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも1つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で3つのアドレスを入力できます。 また、DNS クエリーを行う際に検索する DNS ドメインのリストを入力することもできます。	検索ドメイン: <input type="text"/> 検索ドメイン: <input type="text"/> 検索ドメイン: <input type="text"/>
LDAP	LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する情報を入力します。	プロファイル名: <input type="text"/> プロファイルサーバー: <input type="text"/> LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。 プロキシバインド識別名: <input type="text"/> プロキシバインドパスワード: <input type="password"/>

インストールのための情報	説明または例	回答:デフォルト(*)
デフォルトルート	<p>デフォルトのルート IP アドレスを指定しますか、それとも OS インストールプログラムに検索させますか。</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。</p> <p>次の選択肢があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ IP アドレスを指定できます。指定された IP アドレスを使用し、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのレポート時に、指定した IP アドレスがデフォルトのルートになります。 ■ OS インストールプログラムに IP アドレスを検出させることができます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上にあり、そのルーターがルーター検索用のインターネット制御メッセージプロトコル (ICMP) を使用して自身を通知している必要があります。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムのブート時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 ■ ルーターを使用していないか、現時点ではソフトウェアに IP アドレスを検出させたくない場合には、「None」を選択できます。ソフトウェアは、レポート時に IP アドレスを自動的に検出しようとしません。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 検出する ■ なし*
タイムゾーン	デフォルトのタイムゾーンを指定する方法。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 地理的地域* ■ GM からの時差 ■ タイムゾーンファイル
root パスワード	システムの root パスワードを選択します。	

▼ インストール済みの **Oracle Solaris** オペレーティングシステムを構成する

103 ページの「Oracle Solaris OS の構成ワークシート」を完成したら、次の手順に従って、インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムを構成します。

- 1 **Oracle ILOM** にログインしていない場合は、シリアル接続を介してローカルにログインするか、または **Ethernet** 接続を介してリモートからログインします。
51 ページの「Oracle ILOM への接続」を参照してください。
- 2 次の方法で、サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
 - サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「System Information」>「Summary」を選択します。次に、「Actions」パネルで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。
-> **start /System**
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /System (y/n)? **y**
Starting /System
 - サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ナビゲーションツリーで「Host Management」>「Power Control」を選択します。次に、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択して、「Save」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。
-> **reset /System**
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to reset /System (y/n)? **y**
Performing hard reset on /System
サーバーがブートプロセスを開始します。
- 3 リモートコンソールを起動します。
 - **Oracle ILOM CLI** の CLI プロンプトで、次のコマンドを入力します。
-> **start /HOST/console**

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
```

```
Serial console started.
```

- **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「**Remote Control**」 > 「**Redirection**」を選択します。次に、「**Launch Remote Console**」ボタンをクリックして、ビデオコンソールのリダイレクトを起動します。

サーバーのブート後に、「GRUB」メニューが表示されます。例(インストール済みのバージョンは異なる場合があります):

```
GNU GRUB Version 1.99 ,5.11.0.175.1.0.0.24.2
```

```
Oracle Solaris 11.1 - Serial Port ttya
```

```
Oracle Solaris 11.1 - Graphics Adapter
```

注- 「GRUB」メニューが表示されたら、5秒以内に選択してください。

4 「GRUB」メニューで、次のいずれかを実行します。

- **Oracle ILOM CLI** を使用している場合は、上下の矢印キーを使用して「**Serial Port (ttya)**」オプションを選択し、**Enter**を押します。
- **Oracle ILOM** リモートコンソールプラス(または直接ビデオポート接続)を使用している場合は、上下の矢印キーを使用して、「**Graphics Adapter**」オプションを選択し、**Enter**を押します。

注- 選択を行わないと、デフォルトで「**Serial Port (ttya)**」が使用されます。つまり、残りの OS 構成プロセスでは、システムが、ビデオポートではなくシリアルポートに出力を送信します。

注- 必要に応じて、「GRUB」メニューで、**e**と入力してブート前にコマンドを編集するか、**c**と入力してコマンド行を開始できます。

5 **Oracle Solaris** インストーラの画面に表示されるプロンプトに従ってオペレーティングシステムを構成します。

103 ページの「[Oracle Solaris OS の構成ワークシート](#)」で収集した情報を使用し、プロンプトに従って、システムおよびネットワークの情報を入力します。

表示される画面は、ネットワーク情報をサーバーに割り当てるために選択した方法(DHCPまたは静的IPアドレス)によって異なります。

システム構成情報を入力すると、サーバーのブートプロセスが完了し、Oracle Solaris ログインプロンプトが表示されます。

参照 更新や登録を含む Oracle Solaris OS の使用については、109 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント」を参照してください。

Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメント

Oracle Solaris オペレーティングシステムのドキュメントは、Oracle ドキュメントの Web サイトで入手できます。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/solaris-11-192991.html>

インストール済みの Oracle Linux OS の構成

初期リリースでは、Sun Server X4-4 には、サーバーにインストール済みの Oracle Linux 6.x オペレーティングシステム (OS) イメージのオプションがあります。このオプションを購入した場合は、インストール済みソフトウェアを構成することでインストールを終了します。インストール済みの OS イメージには、使用しているサーバーモデルに必要なドライバがすべて組み込まれています。

注 - インストール済み Oracle Linux OS のサポートされるバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/goto/X4-4/docs> にある『Sun Server X4-4 プロダクトノート』を参照してください。

次のセクションに示す手順を表示されている順番どおりに実行してください。

手順	タスク	リンク
1	使用しているサーバー環境の Oracle Linux 構成ワークシートに記入します。	111 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」
2	インストール済みの Oracle Linux OS を構成します。	112 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS を構成する」
3	Oracle Linux 6 のドキュメントで、Oracle Linux OS の登録、更新、使用についての情報を確認します。	115 ページの「Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント」

Oracle Linux 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成プロセスを開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報のみを収集する必要があります。

必要なインストール情報	説明	回答
Oracle Linux の root パスワード	使用する root パスワードを選択して出荷時デフォルトのパスワードを置き換えます。文字および長さには制限はありません。	

必要なインストール情報	説明	回答
ネットワークインタフェース	ネットワークに接続するサーバー (eth#) のインタフェースを選択します。(Linux を稼働させたら、 <code>ifconfig -a</code> コマンドを使用してサーバーのネットワークポートを識別しやすくなります。)	
ネットワーク構成 (DHCP を使用しない場合)	サーバーの IP アドレスを入力します。 例: 172.16.9.1	
	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	
	サーバーにゲートウェイを介してアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを入力します。	
	ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを入力します。(ちょうど)1つの DNS が必要です。	

関連項目

- 112 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS を構成する」

▼ インストール済みの Oracle Linux OS を構成する

これらの手順では、サーバーにインストール済みの Oracle Linux を構成する方法について説明します。

- 1 サーバーの **Oracle ILOM** にログインしていない場合は、直接シリアル接続からローカルでログインするか、**Ethernet** 接続からリモートでログインします。
51 ページの「**Oracle ILOM への接続**」を参照してください。
- 2 次のようにして、サーバーの電源を投入するか、サーバーを再起動します。
 - サーバーの電源を投入するには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「**Host Management**」 > 「**Power Control**」をクリックし、メニューで「**Power On**」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、次のように入力します。
-> `start /System`

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /SYS (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーを再起動するには、次のいずれかの方法を使用します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、メニューから「Reset」を選択します。
 - ILOM CLI で、次のように入力します。

```
-> reset /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

サーバーがホストのブートプロセスを開始します。

3 Oracle ILOM で、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します。

- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 > 「Launch Remote Console」をクリックします。
- Oracle ILOM CLI で、次のように入力します。

```
-> start /HOST/console
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
```

サーバーのブート後に、「GRUB」メニューが表示されます。例 (インストール済みのバージョンは異なる場合があります):

```
GNU GRUB version 0.97 (612K lower / 2082932K upper memory)
```

```
+-----+
| Oracle Linux Server Unbreakable Enterprise Kernel (3.8.13-16.2.1.el6uek.x86_64) |
| Oracle Linux Server Red Hat Compatible Kernel (2.6.32-431.el6.x86_64)         |
+-----+
```

```
+-----+
| Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted.                   |
| Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the                        |
| commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments                 |
| before booting, or 'c' for a command-line.                                   |
+-----+
```

```
The highlighted entry will be booted automatically in 5 seconds.
```

注- 「GRUB」メニューが表示されたら、5秒以内に選択してください。

- 4 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用してインストールオプションを選択してから、**Enter**を押します。
次のオプションがあります。
 - Unbreakable Enterprise Kernel
 - Red Hat 互換カーネル

注- Oracle では、すべてのエンタープライズアプリケーションで、Oracle Linux サーバーと Unbreakable Enterprise Kernel を使用することをお勧めします。

- 5 インストールオプションを選択すると、**Linux**が起動します。完了すると、**Linux**システムのログインが表示されます。

例:

```
Oracle Linux Server release 6.5
Kernel 3.8.13-16.2.1.el6uek.x86_64 on an x86_64
```

systemname login:

初回ログインの場合は、**root** アカウントと出荷時デフォルトのパスワード (**root**) を使用します。

- 6 ログイン後に、標準の **Linux** ツールを使用してサーバーの構成を完了します。次のタスクが含まれます。
 - セキュリティーのため、**root** の出荷時デフォルトのパスワードを変更します。
 - ネットワークのサーバーを構成します (DHCP を使用しない場合)。111 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」を参照してください。
 - 必要に応じて、インターネットアクセス用のプロキシを構成します。
 - サーバーを登録し更新します。115 ページの「Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント」を参照してください。
 - 目的のパッケージをインストールします。
- 7 構成が完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで「Remote Console」ウィンドウを閉じて、Oracle ILOM からログアウトします。
 - Oracle ILOM CLI で、**Esc** キーのあとに「(] キー (**Shift + 9**) を押してシリアルリダイレクトセッションを終了し、Oracle ILOM からログアウトします。

参照 更新や登録を含む Oracle Linux OS の使用については、115 ページの「Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント」を参照してください。

Oracle Linux オペレーティングシステムのドキュメント

Oracle Linux 6 オペレーティングシステムのドキュメントは、Oracle ドキュメントの Web サイトで入手できます。

http://docs.oracle.com/cd/E37670_01/index.html

インストール済みの Oracle VM ソフトウェアの構成

初期リリースでは、Sun Server X4-4 には、サーバーにインストール済みの Oracle VM Server 3.2x ソフトウェアイメージのオプションがあります。このオプションを購入した場合は、インストール済みソフトウェアを構成することでインストールを完了します。このインストール済みソフトウェアイメージには、サーバーモジュールに必要なすべてのドライバが含まれています。

注-インストール済み Oracle VM のサポートされているバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/goto/X4-4/docs> にある『Sun Server X4-4 プロダクトノート』を参照してください。

次のセクションに示す手順を表示されている順番どおりに実行してください。

手順	タスク	リンク
1	Oracle VM ソフトウェアの要件を確認します。	117 ページの「インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件」
2	構成時に必要な情報を収集します。	118 ページの「Oracle VM 構成ワークシート」
3	インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成します。	119 ページの「インストール済み Oracle VM Server を構成する」
4	Oracle VM のドキュメントで、Oracle VM の登録、更新、使用についての情報を確認します。	122 ページの「Oracle VM のドキュメント」

インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件

システムにインストール済みの Oracle VM Server ソフトウェアを使用する場合は、Oracle VM インフラストラクチャーの管理に使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。互換性を確保する必要がある場合は、使用している Oracle VM Server または Oracle VM Manager をアップグレードして、両者のバージョンを一致させてください。

Oracle VM ソフトウェアのアップグレードについては、Oracle VM インストールおよびアップグレードガイドを参照してください。Oracle VM のドキュメントは次の Web サイトで入手できます。<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

Oracle VM 構成ワークシート

Oracle VM Server の構成を開始する前に、このセクションのワークシートを使用して必要な情報を収集してください。

構成用の情報	説明または例	回答
Oracle VM Server の root アカウントのパスワード	root パスワードを選択します。文字および長さに制限はありません。	
Oracle VM エージェントのパスワード	Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは 6 文字以上である必要があります。	
ネットワークインタフェース	サーバーの管理に使用するインタフェース (eth#) を入力します。	
静的 IP アドレス	サーバーの IP アドレスを入力します。静的 IP アドレスは必須です。 例: 192.0.2.0	
ネットマスク	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	
ゲートウェイ	サーバーにゲートウェイ経由でアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。	
DNS サーバー	ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを入力します。(ちょうど) 1 つの DNS が必要です。	

構成用の情報	説明または例	回答
ホスト名	サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。 例: xxx.oracle.com	

▼ インストール済み Oracle VM Server を構成する

これらの手順では、サーバーにインストール済みの Oracle VM Server を構成する方法についてのみ説明します。Oracle VM には、Oracle VM Manager など、別のコンポーネントもあり、仮想マシン環境をサポートするには、これらのコンポーネントがインストールされているか、すでに稼働している必要があります。

- 1 **Oracle ILOM** にログインしていない場合は、ローカルでシリアル接続からログインするか、またはリモートで **Ethernet** 接続を使用してログインします。
51 ページの「[Oracle ILOM への接続](#)」を参照してください。
- 2 次の方法で、サーバーの電源を入れるか、サーバーをリセットします。
 - サーバーの電源を入れるには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースのナビゲーションツリーで、「System Information」>「Summary」を選択します。次に、「Actions」パネルで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。
-> **start /System**
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
Starting /System
 - サーバーをリセットするには、次のいずれかの方法を使用します。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースから、ナビゲーションツリーで「Host Management」>「Power Control」を選択します。次に、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択して、「Save」をクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。
-> **reset /System**
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing hard reset on /System

サーバーがブートプロセスを開始します。

3 Oracle ILOM で、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します。

- Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 > 「Launch Remote Console」をクリックします。
- Oracle ILOM CLI で、次のように入力します。

```
-> start /HOST/console
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y  
Serial console started.
```

サーバーのブート後に、「GRUB」メニューが表示されます。例 (インストール済みのバージョンは異なる場合があります):

```
GNU GRUB version 0.97 (612K lower / 2082932K upper memory)  
  
+-----+  
Oracle VM Server-ovs (xen-4.1.3 2.6.39-300.32.6.el5uek)  
Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.1.3 2.6.39-300.32.6.el5uek)  
  
+-----+  
Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted.  
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the  
commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments  
before booting, or 'c' for a command-line.  
  
The highlighted entry will be booted automatically in 5 seconds.
```

注- 「GRUB」メニューが表示されたら、5秒以内に選択してください。

4 「GRUB」メニューで、次のいずれかを実行します。

- Oracle ILOM CLI を使用している場合は、上下の矢印キーを使用してシリアルコンソールオプションを選択し、**Enter**を押します。
- Oracle ILOM リモートコンソールプラス (または直接ビデオポート接続) を使用している場合は、上下の矢印キーを使用して、「シリアルコンソール」を指定しないオプションを選択し、**Enter**を押します。

注 - 選択を行わないと、デフォルトでシリアルコンソールが使用されます。つまり、残りの OS 構成プロセスでは、システムが、ビデオポートではなくシリアルポートに出力を送信します。

注 - 必要に応じて、「GRUB」メニューで、e と入力してブート前にコマンドを編集するか、c と入力してコマンド行を開始できます。

- 5 プロンプトが表示されたら、**root** パスワードと **Oracle VM Agent** パスワードを入力します。

例:

```
Starting OVM console server:          [ OK ]
Starting OVM ovmwatch services:      [ OK ]
Starting ovs-agent:                  [ OK ]
Starting ovs-agent services:         [ OK ]

Configuring Oracle VM...              [ OK ]

Enter new root password:
Confirm password:

Enter new Oracle VM Agent password:
Confirm password:

Configuring network.
```

注 - root および Oracle VM Agent のパスワードの入力を求めるプロンプトは、Oracle VM Server を最初にブートしたときだけ表示されます。

- 6 プロンプトに従ってオンボードのネットワークインタフェースコントローラ (NIC) を選択し、ネットワークに関するほかの必須情報を構成および入力します。

This tool is used to select the NIC used by the OVM Manager.
You can exit at any time by pressing CTRL-C.

Here's the list of current available network interfaces.
eth0 eth1 eth2 eth3

Please select interface(s) to be used for OVM management.
These interfaces will be configured for redundancy.
eth1

- 7 すべての構成内容が正しければ、プロンプトが表示されたときに「y」と入力し、**Enter** を押して設定を保存します。

すべての設定を入力して保存すると、システムが Oracle VM Server コンソールセッションをロードします。例:

```
|Oracle VM Server 3.2.X Console [Alt-F2 for login console] |
|-----|
```

```
|Local hostname      : lynxp-ovm.us.oracle.com
|Manager UUID       : 0004fb0000010000a060c639d1075957
|Hostname           : None
|Server IP          : None
|Server Pool        : None
|Clustered          : No
|Server Pool Virtual IP : None
|Cluster state      : Offline
|Master Server      : No
|Cluster type       : None
|Cluster storage    : None
|
|OVS Agent          : Running
|VMs running        : 0
|System memory      : 4087
|Free memory        : 2439
|Uptime             : 0 days, 4 hours, 33 minutes
```

これで、インストール済み Oracle VM Server の構成が完了します。

参照 更新や登録を含む Oracle VM の使用については、122 ページの「Oracle VM のドキュメント」を参照してください。

Oracle VM のドキュメント

Oracle VM の使用の詳細な情報については、次で入手できる Oracle VM ドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

サーバーファームウェアとソフトウェアの入手

このセクションでは、サーバーのファームウェアとソフトウェアにアクセスするためのオプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーファームウェアとソフトウェアの更新について学びます。	123 ページの「ファームウェアとソフトウェアの更新」
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプションについて学びます。	124 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション」
使用可能なファームウェアとソフトウェアパッケージを確認します。	124 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」
Oracle System Assistant、My Oracle Support、または物理メディアのリクエストにより、ファームウェアおよびソフトウェアパッケージにアクセスします。	126 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセス」
ファームウェアとソフトウェアの更新をインストールします。	130 ページの「更新のインストール」

ファームウェアとソフトウェアの更新

サーバー用のハードウェアドライバやツールなどのファームウェアおよびソフトウェアは、定期的に更新されます。これらは、ソフトウェアリリースとして入手可能になります。ソフトウェアリリースは、サーバー用の使用可能なファームウェア、ハードウェアドライバ、ユーティリティをすべて含んだ一連のダウンロード（パッチ）です。これらはすべてまとめてテストされています。ダウンロードに含まれる ReadMe ドキュメントには、以前のソフトウェアリリースからの変更点および変更されていない点が説明されています。

サーバーのファームウェアとソフトウェアは、ソフトウェアリリースが入手可能になりしだい、更新してください。ソフトウェアリリースにはしばしばバグの修正が含まれるため、更新により、サーバーソフトウェアと、最新のサーバーファームウェアおよびほかのコンポーネントのファームウェアとソフトウェアとの互換性が保証されます。

ダウンロードパッケージ内の ReadMe ファイルには、ダウンロードパッケージ内の更新されたファイル、および現在のリリースで修正されたバグに関する情報が含まれます。プロダクトノートには、サポートされるサーバーソフトウェアのバージョンに関する情報も含まれます。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション

次のオプションのいずれかを使用して、使用するサーバー用の最新ファームウェアおよびソフトウェアセットを入手します。

- **Oracle System Assistant** - Oracle System Assistant は、出荷時にインストールされている、Oracle サーバー用の新しいオプションであり、サーバーのファームウェアおよびソフトウェアを簡単にダウンロードおよびインストールできるようにします。

Oracle System Assistant の使用の詳細については、『[Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド \(http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs\)](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』を参照してください。

- **My Oracle Support** - すべてのシステムファームウェアおよびソフトウェアは、My Oracle Support Web サイトから入手できます。

My Oracle Support Web サイトで入手可能なものの詳細については、<http://support.oracle.com> を参照してください。

My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする方法は、[126 ページの「My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする」](#)を参照してください。

- **物理メディアのリクエスト (PMR)** - My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。

詳細は、[127 ページの「物理メディアのリクエスト」](#)を参照してください。

入手可能なソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support では、ダウンロードは製品ファミリ、製品、およびバージョン別にグループ分けされています。バージョンには1つ以上のダウンロード (パッチ) が含まれます。

サーバーとブレードの場合、パターンは似ています。この製品はサーバーです。サーバーごとにリリースセットが含まれます。これらのリリースは、実際のソフトウェア製品リリースではなく、サーバーの更新リリースのことです。これらの更新はソフトウェアリリースと呼ばれ、まとめてテスト済みの複数のダウンロードで構成されます。各ダウンロードには、ファームウェア、ドライバ、またはユーティリティが含まれます。

次の表に示すように、My Oracle Support には、このサーバーファミリ向けの同じダウンロードタイプのセットが含まれます。これらも、物理メディアのリクエスト (PMR) を行なって依頼できます。Oracle System Assistant を使用しても、同じファームウェアおよびソフトウェアをダウンロードできます。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
Sun Server X4-4 SW <i>version</i> – Firmware Pack	Oracle ILOM、BIOS、およびオプションカードファームウェアを含む、すべてのシステムファームウェア。	最新のファームウェアが必要なとき。
Sun Server X4-4 SW <i>version</i> – OS Pack	OS Pack は、サポートされているオペレーティングシステムのバージョンごとに入手できます。各 OS Pack には、その OS バージョン用のツール、ドライバ、およびユーティリティのパッケージすべてが含まれます。 ソフトウェアには、Oracle Hardware Management Pack および LSI MegaRAID ソフトウェアが含まれます。 Windows OS の場合、この OS Pack には Intel Network Teaming and Install Pack も含まれます。	OS 固有のドライバ、ツール、またはユーティリティを更新する必要があるとき。
Sun Server X4-4 SW <i>version</i> – All Packs	ファームウェアパック、すべての OS パック、およびすべてのドキュメントが含まれています。 このパックには、Oracle VTS や Oracle System Assistant イメージは含まれません。	システムファームウェアと OS 固有のソフトウェアの組み合わせを更新する必要があるとき。
Sun Server X4-4 SW <i>version</i> – Diagnostics	Oracle VTS 診断イメージ。	Oracle VTS 診断イメージが必要なとき。
Sun Server X4-4 SW <i>version</i> – Oracle System Assistant	Oracle System Assistant 回復および ISO 更新イメージ。	Oracle System Assistant を手動で回復および更新する必要があるとき。

各ダウンロードは zip ファイルで、ReadMe ファイル、およびファームウェアやソフトウェアファイルを含むサブディレクトリセットが格納されています。ReadMe

ファイルには、前回のソフトウェアリリース以降に変更されたコンポーネントおよび修正されたバグの詳細が記載されています。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセス

このセクションでは、ソフトウェアリリースファイルのダウンロードまたはリクエストの手順を説明します。

Oracle System Assistant を使用して、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用できます。詳細については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。

更新されたファームウェアおよびソフトウェアを入手する方法は、ほかにも My Oracle Support を使用する方法と、物理メディアをリクエストする方法の2つがあります。参照先:

- 126 ページの「My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする」
- 127 ページの「物理メディアのリクエスト」

▼ My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする

- 1 次の Web サイトへ移動します:<http://support.oracle.com>
- 2 My Oracle Support にサインインします。
- 3 ページ上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
「パッチと更新版」画面が表示されます。
- 4 「検索」画面で、「製品またはファミリー(拡張)」をクリックします。
画面に検索フィールドが表示されます。
- 5 「製品」フィールドで、ドロップダウンリストから製品を選択します。
あるいは、製品名(たとえば、Sun Server X4-4)の全体または一部を、一致するものが表示されるまで入力します。
- 6 「リリース」フィールドで、ドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
- 7 「検索」をクリックします。
ダウンロードできるパッチが一覧表示されます。

入手可能なダウンロードの説明については、[124 ページ](#)の「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」を参照してください。

- 8 ダウンロードするパッチを選択するには、そのパッチをクリックします (**Shift** キーを使用すると、複数のパッチを選択できます)。
ポップアップアクションパネルが表示されます。ポップアップパネルには、「計画に追加」および「ダウンロード」オプションを含め、いくつかのアクションオプションがあります。「計画に追加」オプションの詳細は、関連するドロップダウンボタンをクリックして、「なぜ計画を使用するのですか。」を選択してください。
- 9 パッチをダウンロードするには、ポップアップアクションパネルの「ダウンロード」をクリックします。
「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスが表示されます。
- 10 「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの **zip** ファイルをクリックします。
パッチファイルがダウンロードされます。

物理メディアのリクエスト

手続き上、Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) によって最新のソフトウェアリリースを入手できます。

物理メディアのリクエストを行うための大まかなタスクに従ってください。

- [127 ページ](#)の「物理メディアのリクエストのための情報の収集」
- [128 ページ](#)の「物理メディアのリクエスト (オンライン)」
- [129 ページ](#)の「物理メディアのリクエスト (電話)」

物理メディアのリクエストのための情報の収集

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次の情報を収集します。

- 製品名、ソフトウェアリリースのバージョン、および必須パッチを入手します。最新のソフトウェアリリースおよびリクエストしているダウンロードパッケージ (パッチ) の名前を知っていると、リクエストを実行しやすくなります。
- *My Oracle Support* にアクセスできる場合 - [126 ページ](#)の「*My Oracle Support* を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする」の手順に従って、最新のソフトウェアリリースを確認し、入手可能なダウンロード

(パッチ)を表示します。パッチのリストを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は「パッチ検索結果」ページからほかのページに移動できます。

- *My Oracle Support* にアクセスできない場合 - 124 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」にある情報を使って、目的のパッケージを判断してから、最新のソフトウェアリリース用のこれらのパッケージをリクエストしてください。
- 出荷情報を手元に用意します。リクエストの際に、連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所を入力する必要があります。

関連項目

- 128 ページの「物理メディアのリクエスト(オンライン)」
- 129 ページの「物理メディアのリクエスト(電話)」

▼ 物理メディアのリクエスト(オンライン)

- 1 次の Web サイトにアクセスします:<http://support.oracle.com>。
- 2 **My Oracle Support** にサインインします。
- 3 ページの右上隅にある「問合せ先」リンクをクリックします。
- 4 「リクエストの説明」セクションに、次の情報を入力します。
 - a. 「リクエスト・カテゴリ」ドロップダウンメニューで、次を選択します。
ソフトウェアおよび OS メディアリクエスト
 - b. 「リクエスト・サマリー」フィールドに、「**Sun Server X4-4** の最新ソフトウェアリリースの **PMR**」と入力します。
- 5 「リクエスト詳細」セクションで、次の表に示されている質問に回答します。

質問	回答
物理ソフトウェアメディアの送付リクエストですか？	はい
どの製品ラインに関するメディアのリクエストですか？	Sun 製品
パッチのダウンロードに必要なパスワードの確認ですか？	いいえ

質問	回答
CD/DVD でのパッチのリクエストですか？	はい
パッチを CD や DVD でリクエストする場合、パッチの番号、OS とプラットフォームをお知らせください。	希望するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力してください。
物理メディア送付をリクエストしている製品の 名前とバージョンをリストしてください。	製品名: Sun Server X4-4 バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号
リクエストするメディアの OS とプラットフォームをお知らせください。	OS 固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここで OS を指定します。システム ファームウェアのみをリクエストする場合は、「汎用」と入力します。
メディアに言語は必要ですか。	いいえ

- 6 出荷先担当者の連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所の情報を入力します。
- 7 「次へ」をクリックします。
- 8 「ファイルのアップロード」の「関連ファイル」画面で「次へ」をクリックします。
情報を指定する必要はありません。
- 9 「関連ナレッジ」画面で、リクエストに該当するナレッジ記事を確認します。
- 10 「送信」をクリックします。

- 参照
- 127 ページの「物理メディアのリクエストのための情報の収集」
 - 129 ページの「物理メディアのリクエスト(電話)」

▼ 物理メディアのリクエスト(電話)

- 1 次の **Oracle Global Customer Support Contacts Directory** にある該当する番号を使用して、**Oracle** サポートに電話をかけます。
<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>
- 2 **Sun Server X4-4** の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を **Oracle** サポートに伝えます。
 - My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースおよびパッチ番号の情報にアクセスできる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。

- ソフトウェアのリリース情報にアクセスできない場合は、Sun Server X4-4 の最新のソフトウェアリリースをリクエストします。

- 参照
- 127 ページの「物理メディアのリクエストのための情報の収集」
 - 128 ページの「物理メディアのリクエスト(オンライン)」

更新のインストール

次のセクションでは、ファームウェアとソフトウェアの更新のインストールに関する情報を提供します。

- 130 ページの「ファームウェアのインストール」
- 131 ページの「ハードウェアドライバと OS ツールのインストール」

ファームウェアのインストール

更新されたファームウェアは、次のいずれかの方法でインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center - Ops Center Enterprise Controller** では、Oracle から自動的に最新のファームウェアをダウンロードするか、Enterprise Controller 内にファームウェアを手動でロードできます。どちらの場合も、Ops Center でファームウェアを1つ以上のサーバー、ブレード、またはブレードシャーシにインストールできます。

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant** - Oracle System Assistant は、最新のファームウェアを Oracle からダウンロードしてインストールできます。

詳細については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。

- **Oracle Hardware Management Pack** - Oracle Hardware Management Pack 内の fwupdate CLI ツールを使用すると、システム内部のファームウェアを更新できます。

詳細は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp> で Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリを参照してください。

- **Oracle ILOM** - Oracle ILOM および BIOS ファームウェアは、Oracle ILOM Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使用して更新可能な唯一のファームウェアです。

詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> で Oracle Lights Out Manager (ILOM) ドキュメントライブラリのサポートされているバージョンのドキュメントを参照してください。

ハードウェアドライバと OS ツールのインストール

Oracle Hardware Management Pack などの、更新されたハードウェアドライバおよびオペレーティングシステム (OS) 関連のツールは、次のいずれかを使用してインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center**

詳細は、<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/044497.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant**

詳細については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)』を参照してください。

- JumpStart、KickStart、サードパーティーのツールなどの、その他の配備メカニズム。

詳細は、オペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

システム電源の制御と BIOS メッセージの表示

このセクションでは、システム電源を制御し、BIOS メッセージを表示する方法について説明します。次の表に示すトピックが含まれています。

説明	リンク
サーバーの電源を投入し、BIOS メッセージを表示します。	133 ページの「サーバーの電源投入と BIOS メッセージの表示」
エラーが発生したらサーバーの電源を切断します。	<ul style="list-style-type: none">■ 137 ページの「サーバーの電源切断による正常停止」■ 140 ページの「サーバーの電源切断による即時停止」
サーバーをリセットします。	142 ページの「サーバーのリセット」

サーバーの電源投入と BIOS メッセージの表示

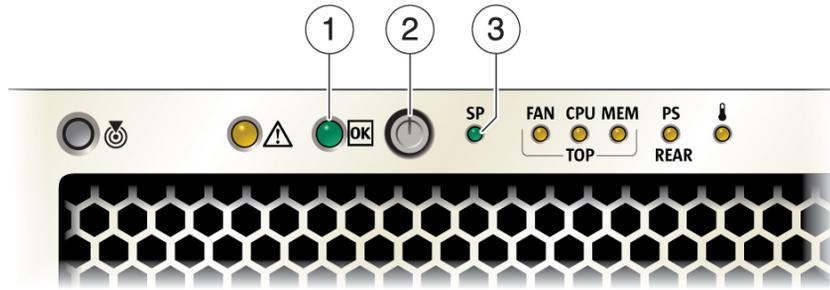
サーバーに主電源を投入し、BIOS メッセージを表示するには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。

- [133 ページの「電源ボタンを使用したサーバーの電源投入」](#)
- [134 ページの「Oracle ILOM CLI を使用したサーバーの電源投入」](#)
- [135 ページの「Oracle ILOM の Web インタフェースを使用したサーバーの電源投入」](#)
- [135 ページの「BIOS メッセージの表示」](#)

▼ 電源ボタンを使用したサーバーの電源投入

始める前に 主電源を投入する前に、電源コードが接続されていて、サーバーがスタンバイ電源モードになっている必要があります。[48 ページの「電源コードの接続」](#)を参照してください。

- 1 SP インジケータ [3] が常時点灯状態かどうかを確認することで、システムの電源投入の準備ができていることを確認します。



吹き出し 番号	説明
1	電源/OK LED
2	電源ボタン
3	SP OK/障害 LED

- 2 主電源ボタン [2] を押します。
サーバーがブートプロセスに入ると、電源 OK インジケータ [1] が点滅します。

次の手順 [135 ページの「BIOS メッセージの表示」](#)

▼ Oracle ILOM CLI を使用したサーバーの電源投入

- 1 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。
- 2 CLI プロンプトで次のコマンドを入力します。
-> **start /System**
サーバーに主電源モードが適用されます。

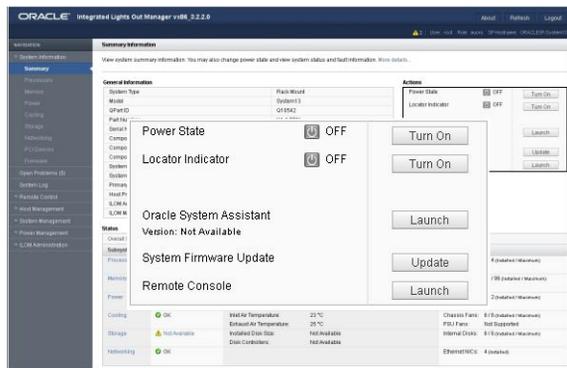
次の手順 [135 ページの「BIOS メッセージの表示」](#)

▼ Oracle ILOM の Web インタフェースを使用したサーバーの電源投入

- 1 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM の Web インタフェースにログインします。

Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」 > 「Summary」ページが表示されます。

- 2 「Summary」ページの「Actions」ボックスで、「Turn On」ボタンをクリックします。



サーバーに主電源が投入されます。すぐに power state Off インジケータが緑色で点灯し、「Turn On」ボタンが「Turn Off」ボタンに変わります。

次の手順 [135 ページの「BIOS メッセージの表示」](#)

▼ BIOS メッセージの表示

始める前に BIOS 起動メッセージは、KVM を使用してサーバーで、または Oracle ILOM リモートコンソールプラス機能を使用してリモートで表示できます。

- 1 システムの電源を入れると、最初の BIOS 画面が表示されます。

この画面は、BIOS とサーバーに関する情報を提供します。この時点で、CPU やメモリーなどの内蔵リソースがスキャンされ、トレーニングが実行されます。進行状況は、チェックポイントのステータスコードとともに、画面下部に表示されます。このプロセスの間にリセットが発生する可能性もあります。ステータスコード情報については、『サービスマニュアル』を参照してください。

注-完了までの時間は、取り付けられている CPU とメモリーリソースの量によって異なります。



```
ORACLE
Copyright (c) 2012,2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.
BIOS Version : 24010201
Product Name : Sun Server X4-4

25 percent done. Status Code: AF 00
```

- 2 初期リソースチェックが行われたあと、BIOS スプラッシュ画面が表示されます。ユーティリティーホットキーがリストされ、システムの **Power On Self Test (POST)** が行われます。

利用可能な場合は、BIOS 設定プログラムにアクセスするためのホットキー、オプション ROM ユーティリティー (HBA とネットワークカード)、一時ブートデバイスの選択メニュー (BBS ポップアップ)、および Oracle System Assistant が表示されます。POST コードは画面の右下に表示されます。

注-ブートモードが UEFI の場合、これらのオプションのいくつかは BIOS 設定ユーティリティーでのみ使用可能です。



- 3 POSTが完了すると、システムは、デフォルトのブートデバイス、または「**BBS Popup**」メニューから選択した一時ブートデバイスのいずれかから、ブートを試みます。可能な場合は、オペレーティングシステムがロードされます。システムが使用できる状態になります。

サーバーの電源切断による正常停止

サーバーを正常に停止するには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。これらの手順を実行すると、ACPI対応のOSでは、オペレーティングシステムが正常に停止されます。ACPI対応のオペレーティングシステムが動作していないサーバーは、即時に停止してスタンバイ電源モードになります。

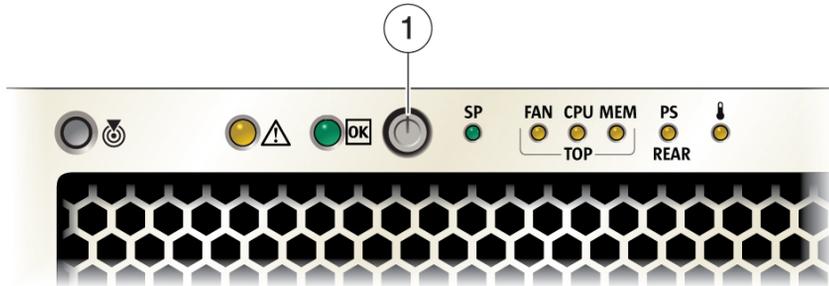
注-サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを引き抜く必要があります。

- 138 ページの「電源ボタンを使用した正常な停止」
- 138 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した正常な停止」
- 139 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止」

▼ 電源ボタンを使用した正常な停止

- 1 フロントパネルにある電源ボタン[1]を押してすぐに放します。

ACPI (Advanced Configuration and Power Interface) が有効なオペレーティングシステムでは、これで適切な順序でのシャットダウンが実行されます。ACPI が有効なオペレーティングシステムを実行していないサーバーの場合は、即時にスタンバイ電源モードに移行して停止します。



吹き出し 番号	説明
------------	----

1	電源ボタン
---	-------

主電源が停止すると、システムはスタンバイモードになります。スタンバイ電源モードではOKインジケータが点滅します。

- 2 サーバーの電源をスタンバイ電源モードから完全に切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。
サーバーは完全に停止します。

- 参照
- 13 ページの「フロントパネルの機能」
 - 138 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した正常な停止」
 - 139 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止」
 - 140 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」

▼ Oracle ILOM CLI を使用した正常な停止

- 1 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

- 2 CLIプロンプトで次のコマンドを入力します。
-> **stop /System**
サーバーが正常な停止を実行して、スタンバイ電源モードに移行します。
- 3 サーバーの電源をスタンバイ電源モードから完全に切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。
サーバーは完全に停止します。

- 参照
- 138 ページの「電源ボタンを使用した正常な停止」
 - 139 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止」

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した正常な停止

- 1 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM の Web インタフェースにログインします。
Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」 > 「Summary」 ページが表示されます。
- 2 左側のペインで、「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックし、「Select Action」 リストボックスから「Graceful Shutdown and Power Off」を選択します。
- 3 「Save」、「OK」の順にクリックします。
ホストサーバーが正常な停止を実行して、スタンバイ電源モードに移行します。
- 4 サーバーの電源をスタンバイ電源モードから完全に切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。
サーバーは完全に停止します。

- 参照
- 138 ページの「電源ボタンを使用した正常な停止」
 - 138 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した正常な停止」

サーバーの電源切断による即時停止

サーバーを即時停止するには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。



注意-データ損失の可能性があります。即時停止方法を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。

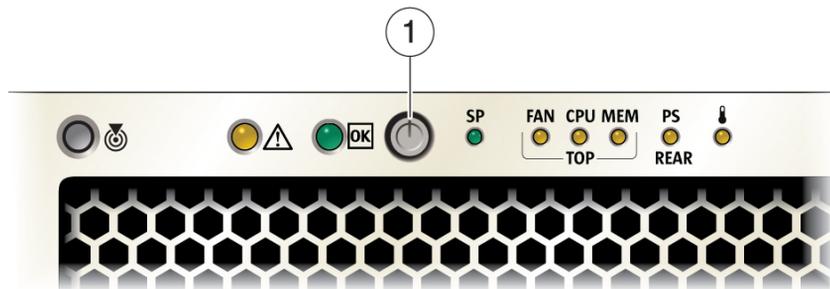
注-サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを引き抜く必要があります。

- 140 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」
- 141 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した即時停止」
- 141 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止」

▼ 電源ボタンを使用した即時停止

- 1 主電源が切れるまで、電源ボタンを押し続けます。

電源ボタンを数秒間押し続ける必要があります。サーバーが停止して、スタンバイ電源モードに移行します。スタンバイ電源モードではOK インジケータが点滅します。



吹き出し 番号	説明
------------	----

1	電源ボタン
---	-------

- 2 サーバーの電源をスタンバイ電源モードから完全に切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。
サーバーは完全に停止します。

- 参照
- 141 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した即時停止」
 - 141 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止」

▼ Oracle ILOM CLI を使用した即時停止

- 1 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。
- 2 CLI プロンプトで次のコマンドを入力します。
`-> stop -f /System`
サーバーが即時に停止して、スタンバイ電源モードに移行します。
- 3 サーバーの電源をスタンバイ電源モードから完全に切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。
サーバーは完全に停止します。

- 参照
- 140 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」
 - 141 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止」

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した即時停止

- 1 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM の Web インタフェースにログインします。
Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」>「Summary」ページが表示されます。
- 2 左側のペインで、「Host Management」>「Power Control」をクリックし、「Select Action」リストボックスから「Immediate Power Off」を選択します。
- 3 「Save」、「OK」の順にクリックします。
サーバーが即時に停止して、スタンバイ電源モードに移行します。
- 4 サーバーの電源をスタンバイ電源モードから完全に切断するには、電源コードをサーバーから引き抜きます。
サーバーは完全に停止します。

- 参照
- 140 ページの「電源ボタンを使用した即時停止」
 - 141 ページの「Oracle ILOM CLI を使用した即時停止」

サーバーのリセット

次のいずれかのセクションの手順に従ってサーバーをリセットします。



注意-データ損失の可能性があります。サーバーをリセットすると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。

- 142 ページの「Oracle ILOM CLI を使用したサーバーのリセット」
- 142 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーのリセット」

▼ Oracle ILOM CLI を使用したサーバーのリセット

- 1 管理者アカウントを使用して、**Oracle ILOM** のコマンド行インタフェース (**CLI**) にログインします。
Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。
- 2 **CLI** プロンプトで次のコマンドを入力します。
-> **reset /System**
サーバーがリセットされます。

- 参照
- 142 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーのリセット」

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用したサーバーのリセット

- 1 管理者アカウントを使用して、**Oracle ILOM** の **Web** インタフェースにログインします。
Oracle ILOM Web インタフェースの「System Information」 > 「Summary」 ページが表示されます。
- 2 左側のペインで、「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックし、「Select Action」 リストボックスから「Reset」を選択します。

- 3 「Save」、「OK」の順にクリックします。
ホストサーバーがリセットされます。

参照 ■ [142 ページの「Oracle ILOM CLI を使用したサーバーのリセット」](#)

インストールの問題のトラブルシューティング

このセクションでは、サーバーでの設置の問題のトラブルシューティングに役立つ情報を提供します。

説明	リンク
トラブルシューティングおよび診断の参考情報について学習します。	145 ページの「トラブルシューティングおよび診断の参考」
サーバーの情報を記録してから保守部門に連絡します。	146 ページの「技術サポート情報ワークシート」
システムのシリアル番号の場所を確認してから保守部門に連絡します。	146 ページの「サーバーのシリアル番号の確認」

トラブルシューティングおよび診断の参考

Sun Server X4-4 サービスマニュアルには、トラブルシューティングの問題についての製品固有の情報が記載されています。『[Sun Server X4-4 サービスマニュアル](#)』の「[トラブルシューティングと診断](#)」を参照してください。

『Oracle x86 サーバー診断ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)には、Oracle's x86 サーバー用に使用できるさまざまなツールについての情報が記載されています。

ナレッジ記事、ホワイトペーパー、製品アップデートは、Oracle サポートポータルから入手できます。

<http://support.oracle.com>

技術サポート情報ワークシート

トラブルシューティング情報を使用しても問題を解決できない場合は、次の表を使用して、サポート担当者に伝える必要がある情報を収集してください。

必要なシステム構成情報	お客様の情報
サービス契約番号	
システムモデル	
オペレーティングシステム	
システムのシリアル番号	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先	
システムの設置場所の住所	
スーパーユーザーのパスワード	
問題の概要と、問題が発生したときに実行した操作内容	
IPアドレス	
サーバー名(システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメイン名	
プロキシサーバー構成	

サーバーのシリアル番号の確認

システムの保守を依頼するときに、使用しているサーバーのシリアル番号が必要になることがあります。あとで使用するときのために、この番号を記録しておいてください。次のいずれかの方法を使用して、サーバーのシリアル番号を確認します。

- サーバーのフロントパネルで、ベゼルの左下を見てサーバーのシリアル番号を確認します。
- サーバーのパッケージに付属している黄色い Customer Information Sheet (CIS) を確認します。このシートにシリアル番号が記載されています。
- Oracle ILOM から次のようにします。
 - Web インタフェースを使用してログインし、「Summary」ページを表示します。

- CLIを使用してログインし、次のコマンドを入力します。

show /SYS

索引

A

AC OK インジケータ, バックパネル, 15

B

BIOS

ブートモード (レガシーまたは UEFI)
設定, 22

C

CLI, Oracle ILOM, 説明, 20

E

Ethernet 接続, Oracle ILOM へのログイン, 54-56

Ethernet ポート

接続, 47-48

バックパネル, 15

L

LED, 「インジケータ」を参照

M

My Oracle Support, ソフトウェアリリース
パッケージのダウンロードに使用する,
126-127

N

NET MGT ポート

接続, 47-48

バックパネル, 15

O

Oracle Hardware Management Pack, 説明, 21

Oracle ILOM

Oracle System Assistant の起動, 70-72

初期設定と構成, 51-67

接続, 51-67

説明, 20

デフォルトのユーザー名とパスワード, 53-54,
54-56

Oracle Linux, インストール済みのイメージの構
成, 111-115

Oracle Solaris OS, インストール済みのイメージの
構成, 103-109

Oracle System Assistant

Oracle ILOM を使用した起動, 70-72

説明, 19

ローカルで起動する, 72-75

Oracle VM, インストール済みのイメージの構成, 117-122

P

PCIe スロット, バックパネル, 15

R

RAID 構成, 77-102

S

SER MGT ポート

接続, 47-48

バックパネル, 15

SP, 機能の説明, 18

SPOK インジケータ, フロントパネル, 13

U

Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) BIOS, 説明, 22

USB ポート

接続, 47-48

バックパネル(設置ガイド), 15

フロントパネル(設置ガイド), 13

W

Web インタフェース, Oracle ILOM, 説明, 20

い

インジケータ

バックパネル(設置ガイド), 15

フロントパネル(設置ガイド), 13

インストール済みの OS イメージの RAID の制限, 77

インストール済みの OS オプション

Oracle Linux, 111-115

Oracle Solaris, 103-109

Oracle VM, 117-122

インベントリ, 28

お

オプションのサーバーコンポーネント, 30

オペレーティングシステム

インストール済みのイメージの構成

Oracle Linux, 111-115

Oracle Solaris, 103-109

Oracle VM, 117-122

か

環境仕様, 設置ガイド, 26

管理ツール, 説明, 18

け

ケーブル管理アーム (CMA)

動作の確認(設置ガイド), 45

取り付け(設置ガイド), 40-45

こ

工具および機器, サーバーの設置に必要な, 29
更新

インストールする, 130

ファームウェアとソフトウェアの入手, 123

さ

サーバーの開梱, 28

サーバーの電源切断, 正常停止, 137

サーバーの電源投入

方法, 133

メッセージの表示, 133

サービスプロセッサ, 「SP」を参照

し

システムステータスインジケータ

バックパネル, 15

フロントパネル, 13

システムの機能, 16

出荷梱包箱の内容, 28

準備

ストレージドライブ

BIOSユーティリティの使用, 90

Oracle System Assistant, 79

仕様

環境

設置ガイド, 26

システムがサポートする機能のリスト, 16

電気

設置ガイド, 26

物理

設置ガイド, 25

シリアル接続, Oracle ILOM へのログイン, 53-54

シリアルヌルモデムケーブル, 接続, 47-48

す

ストレージドライブ

OSインストールの準備, 77

RAID構成オプション, 77

準備

BIOSユーティリティの使用, 90

Oracle System Assistant, 79

スライドレール

構成部品, 34-36

動作の確認(設置ガイド), 45

せ

静電気防止用リストストラップ, 29

静電放電(ESD), 29

設置タスクの概要, 11-12

そ

ソフトウェア

更新をインストールする, 130

最新の入手, 123-131

物理メディアの入手, 127

ソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support を使用してダウンロードする, 126-127

Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用してダウンロードする, 130

Oracle System Assistant を使用してダウンロードする, 130

ち

注意事項, 29

て

電気仕様, 設置ガイド, 26

電源OKインジケータ, フロントパネル, 13

電源コネクタ, 15

電源装置OKインジケータ, バックパネル, 15

電源装置故障インジケータ

バックパネル, 15

フロントパネル, 13

電源入力コネクタ, 接続, 47-48

転倒防止バー, 37-40

は

バックパネル, システムインジケータ, 接続とコンポーネント, 15

ひ

ビデオポート

接続, 47-48

バックパネル, 15

フロントパネル, 13

ふ

- ファームウェア
 - 更新をインストールする, 130
 - 最新の入手, 123-131
- ブートディスク, 77-102
- 複数サーバー OS とファームウェアのプロビジョニング, 18
- 物理仕様, 設置ガイド, 25
- フロントパネル
 - コントロール場所, 48-50
 - システムインジケータ、接続とコンポーネント, 13

ほ

- ボリュームの作成
 - BIOS ユーティリティーの使用, 90
 - Oracle System Assistant, 79

ら

- ラックの安全上の注意事項, 31
- ラックマウント
 - CMA スライドレールコネクタ, 42
 - キット, 31-45
 - ケーブルの取り付け, 43
 - ケーブルフックとループストラップ, 43
 - 固定部品の取り付け, 33-34
 - シャーシ位置決めピン, 33
 - スライドレール構成部品, 34-36
 - スライドレールストップの解放, 45
 - 転倒防止バー, 37-40
 - 取り付け穴, 34-36
 - 取り付けピン, 35
 - ラックの互換性, 32
 - レール構成部品, 31-45

ろ

- ロケータインジケータ, 13